求道

第七卷
第七號

求道第七卷第七號目次

求道　近角常觀

◎深信と報謝　講話

◎如來の護念　聖傳

◎ヂヤーナタカ釋尊傳　久遠劫の昔（承前）

講義

◎歎異鈔――第十二章　近角常觀

歎異鈔の著者は何者か

『先師』につきて

告白

◎遺る瀨なき御念力　小松原謙三

◎信仰書簡四章　時報

◎爾後の地方傳道

講話

毎日曜午前九時　求道學舍《本郷區森川町一番地》

毎土曜午後二時　第二求道會《九段坂佛教倶樂部》

毎月二日午後七時　第三求道會《日本橋蠣殼町説教所》

十月一日第二求道會より開講

求道　第七卷第七號

深信と報謝

水に沒して直下千尋深く沈みて足海底に達するものは必ず亦騰上千尋一直線に浮上りて水面に浮ぶべし。我等亦一たび如來大悲の願海に沒入するものは、其深廣の奥底に達するや忽ち人生の海面に浮び來りて此に感謝の活動となり、報恩の經營となる。相對人生の陸上に蠢々相爭へる我等、一たび絶對大悲の海水に投入すと雖、若し絶對の奥底に達せずんば再び相對人生の水面に浮び來りて游泳活躍報謝の經營を爲すことあたはざるべし。世の信仰問題に身を沒するもの、時として心中何等の雲翳ありて未だ絶對の滿足を來すあたはず、恰も氷の表面融くるも底猶堅く凝結して溶解するあたはざるが如き感を爲すものは是水に沒して足其底に達せざるもの、却て信仰問題の水に沈溺して身を輕く人生活動の水面に游泳自在なることあたはざる也。是畢竟信仰の奥底に達せざれば也。大悲の窮極を味はざれば也。善導の所謂佛恩報謝の念なき等は雜修の失なりといふ所以實に此に在り。聖人化卷に曰く、眞に知んぬ、專修にして雜心なるものは大慶喜心を獲ず。故に宗師は云へり、彼の佛恩を念報することなし、業行を作すと雖心に輕慢を生ず、常に名利と相應ずるが故に、人我自ら覆ふて同行善知識に親近せざる故に、樂みて雜緣に近きて往生の正行を自障障他するが故にと。悲哉垢障の凡愚無際より已來、助正間雜し、定散心雜ふるが故に出離其期なし、自ら流轉輪廻を度るに微塵劫を超過すれども佛願力に歸し難く、大信海に入り難し、良に傷嗟すべし、深く悲嘆すべし。凡そ大小の聖人一切の善人本願の嘉號を以て己が善根と爲すが故に、信を生ずることあたはず、佛智を了らず、彼の因を建立することを了知すること能はざるが故に報土に入ること無き也。是を以て愚禿釋親鸞（中略）爰に久しく願海に入りて深く佛恩を知れり、至德を報謝せんが爲に眞宗の簡要を撫ふて恒常に不可思議の德海を稱念す、彌々斯を喜愛し、特に斯を頂戴する也。

如何に聖人が不可思議本願海の深廣の奥底を深く信じたまひて慶喜踴躍の念やるせなく行住坐臥に報謝の經營をなしたまひしかを知るべき也。故に予は言はんとす、報謝は深信の結

果也、報恩は滿足の横溢せる也。和讃に曰く、彌陀大悲の誓願を、ふかく信ぜんひとはみな、ねてもさめてもへだてなく、南無阿彌陀佛をとなふべしと。

かくの如く念じ來れば人皆以爲らく如何にも然り我等は實に深く信ずること能はず、如何にせば深く信ずることを得んかと。自ら其信を深くせんと試み、而して自ら其深からざるを悲むものあるべし。横川法語に曰く信心淺けれども本願深きが故にたのめば必ず往生す、念佛懶けれども、稱ふれば必ず來迎にあづかる、功德莫大なるが故に、このゆへに本願に遇ふことを喜ぶべしと。我等が深く信ぜんと欲して深く信ずるにあらず、如來の大悲深ければこそ深く信ぜざるを得ざる也。彌陀の大悲ふかければ、佛智の不思議をあらはしてといふ所以實に玆にあり。我等罪業深重のもの此大悲の本願大慈の眞敎によらずんば何の時にか出離其期かあらん。「いづれの行もおよびがたき身なれば地獄は一定すみかぞかし」、幸に大慈大悲の眞實の親心に愚ひたてまつりてこそ、曠劫已來初めて生死を解脱するを得たるなれ。和讃に曰く、弘誓のちからをかふらずば、いづれのときにか娑婆をいでん、佛恩、ふかくおもひつゝ、つねに彌陀を念ずべし。娑婆永劫の苦をすてゝ、淨土無爲を期すること、本師釋迦のちからなり、長時に慈恩を報ずべしと。南無阿彌陀佛〳〵。

深心とは深く信ずるの心也、我等は自身の罪惡生死の凡夫無有出離之緣たることを深信し、同時に彼願力を深信して疑なく慮なく往生を得る身となれるもの、實に深く本願の底を窮めて感謝報恩の人生海面に活躍せるものに非ずや。此の如く我機の惡しきを深信するも、願力の強きを深信するも畢竟是れ如來大悲の親心を頂ける結果也。阿彌陀如來の仰せられけるやうは末代の凡夫、罪業の我等たらんもの、われを一心にたのまん衆生をば必ずすくふべしと仰せられたりと。我等罪業の身にてありながら、猶罪業の身たることを知らざるの輩なり、しかるに大悲の親はかねてしろしめして煩惱具足の凡夫と呼び罪業の我等と呼びたまふに非ずや。我等强情我慢の徒、懈怠輕慢の輩、此大悲の御呼聲の爲めに醒まされて初めて罪業の我等たることを自覺せしめられたる也、現に是れ罪惡生死の凡夫たることを信知せしめられたる也、無有出離之緣たることを深信せざるべからざる也。放蕩の息子は自ら其罪を知らず、其放蕩の子を特に悲憐して、日夜哀々の情禁ぜざる親心によりて、初めて其放蕩の罪を自覺するものなり。我等も我等罪業の我等を悲憐したまふ大悲の親心によりて、初めて罪業の我等たることを深信することを得るなり。而して其罪業の我等の爲に日夜大悲の胸を傷ましめたまふやるせなき親心こそ實に我等が罪業を滅し、煩惱解けて自然に功德の大寶海水を滿足せしめたまふなり、是深き大悲の光、深く我等が胸中に宿りたまふなり。されば我罪の深きを信ずるも親心の力なり、大悲の深きを信ずるも親心の力なり、此の如き深廣の親心に遇ひたてまつれば何物か深く信ぜざるを得べき。和讃に曰く、彌陀智願の廣海に、凡夫善惡の心水も、歸入しぬれはすなはちに、大悲心とぞ轉ずなる。

嗚呼いたゞき來れば深廣の御慈悲なるかな、不可思議の佛智なるかな。如來の智慧海は深廣にして涯底なし、二乘の測る處にあらず、唯佛のみ獨明らかに了りたまへり。嗚呼弘誓一乘海は無碍無邊最勝深妙不可說不可稱不可思議の至德を成就して、無邊極濁惡の我等を救濟したまふ。五濁惡世の我等こそ、金剛の信心ばかりにて、ながく生死をすてはてゝ、自然の淨土にいたるなれ。强剛難化の我等の如き極惡最下の深く閉されたる錠は他の尋常一樣の鍵を以ては開くべからず、唯獨り此極惡最下の衆生を救はんがために特に起したまへる本願の鍵ばかりにて、一念開發の曉に達するなれ、嗚呼何たる大悲ぞや、何たる願力ぞや。極惡深重の衆生は、他の方便さらになし、ひとへに彌陀を稱してぞ、淨土に生るとのべたまふ。嗚呼此放蕩息子には此親なうては助かるべからず。又此親は此放蕩一人の爲に苦勞したまふなり、親一人、子一人唯深重の親心によりて此罪を知らしめ此惠を知らしめたまふ。此に至りて曠劫已來の無明初めて晴れ、六趣四生の因亡し、果滅す、もはや胸中何の滯もなく口に溢るゝものは唯感謝の念佛ばかりなり。南無阿彌陀佛々々々々

如來大悲の恩德は、　身を粉にしても報ずべし、
師主知識の恩德も、　ほねをくだきても謝すべし。

一、前々往上人仰られ候。佛法のためと思召候へば、なにたる御辛勞なも御辛勞とは思召されぬ由仰せられ候。御心まめにて何事も御沙汰候由なり。
一、御病中に蓮如上人仰せら候。御代に佛法な是非とも御再興あらんと思召候御念力一つにて、かやうに今まで心やすくあることは、此法師が冥加に叶ふによりてのことなりと、御自體ありと云云。
（蓮如上人御一代聞書）

講話

如來の護念

（第二求道會土曜講話）

近角常觀

一

今日は此の會でも休暇前最後の講話であります。本郷求道學舍の方でも明日を以てひと先づ休みに致し、明晩より地方傳道に出かけやうと思ひます。夫れ故今明日の話は何うか皆さんにも格段に際を立てゝ、佛の廣大なる慈悲の程をよく聞いて頂き度い。又皆さんにしても、學生諸君ならば丁度之より各郷里に歸られようといふ時である。又然うでなくとも夫れ〴〵地方等へお出かけになる方もある。皆さんの方より言うても之が當分のお仕舞ひになる譯である。殊に未だ御安心なさらぬ方には、猶ほ更能く聽いて頂き度いと思ふ次第であります。

さて今日の題は『如來の護念』といふ。何うかと申するに、佛が此私共を護り念じて下さる事である。即ち佛が我々は知らずに居るけれども、此の私を色々と護り育て、念じて居て下さる。親鸞聖人が『愚禿鈔』上卷末に元照律師の『阿彌陀經義疏』の文をお引きなされて、

勢至章に云はく、十方の如來衆生を憐念したまふこと母の子を憶するが如し。

十方の世界には十方無量の佛が在しますが、其の十方の佛が我々を念じ憐みて下さる事は、母がひとり子を憶ふが如くであるとお示し下さるのである。此の御文の初めに「勢至章に云く」とある。之は此の御文が『首楞嚴經』の勢至菩薩の事をお書きなされてある處から來たからである。次に

大論に曰く、譬ば魚母の若し子を念ぜざれば子即ち壞爛する等の如し。

之は譬である。甚だ通俗な譬へではあるが、魚の母が子供を生み附けて其の多くの子供の育つは、魚の母が其の子供の育つよう護念するからである。魚の母の念力が無ければ其の子供の育つ事は無い。砂の間に生みつけた小供は皆な腐つて仕舞ふ。育つは魚の母の念力の爲めに育つのである。其の如く我々に對し、十方の如來が何うかしてお慈悲に引き入れ度いと色々と念じて居て下さる。其の遣る瀨無き思召が屆いて下さればこそ、お慈悲が頂けるのである。自分の力で頂ける御信心では無い。而して其のお慈悲を頂けば、頂いた後も此の惠みの中に護られる身であるとお示し下さるのである。實に有難きお言葉であります。

此のお言葉を親鸞聖人は、又『大勢至和讃』の中に、和讃に作りてお喜びなされてある。曰く、

超日月光この身には、　念佛三昧おしへしむ、
十方の如來は衆生を、　一子のごとく憐念す。

今の御文と全く同樣のお示しである。十方の如來は衆生をひ

、とり子の如く憐念して下さるといふのである。而して其の直ぐ次ぎの和讃には又、

一子の母をおもふごとくにて、　衆生佛を憶すれば、
現前當來とをからず、　如來を拜見うたがはず

母が子を思ふが如く、佛の方から先づ衆生を念じて下さる廣大のお慈悲故、其の如來の御念力が子供の心に聞えて下さると子供の方から親に向ふ心當り前には有る筈は無けれども、親の御念力が屆く一つで「子の母をおもうごとくにて、衆生佛を憶すれば」である。子供が母の慈悲を喜ぶ如く、佛のお慈悲を喜びて憶念の心が絶えぬ、其の時は「現前當來とをからず、如來を拜見うたがはず」現在のみならず、當來も大悲の惠みに打ち護られて行く事故、心に如來のお慈悲を頂けばやがて淨土に往き直々如來に御目に懸れる事疑ひ無いとの御和讃である。茲の處をお話仕度い爲めに、今日の題を出したのであります。

其處で話が大分廣くなりますが、順序としてちと廣くお話し致しますに、先づ第一に、今申したお言葉に何れも十方の如來とある。十方の如來とあれば、一佛や二佛の事で無い、無量無數の佛である。東西南北四維上下、有ゆる世界に充ち滿ち給へる諸佛如來の事である。處が其の諸佛如來が斯く我々を哀れみ下さると聞く時は、其の澤山なる諸佛如來が前後左右より哀み護念し下さるのであるが、其の哀み下さる思召は如何に頂くのかといふ事になる。茲が非常に肝腎な處であります。此の他力の法門では諸佛即ち阿彌陀佛であるといふ事をいふ。十方の諸佛如來が哀れみ下さるといふ以上、其の澤山なる諸佛如來が哀み下さるに違ひは無けれども、其の諸佛が自分の力でお助け下さるといふのでは無い。十方の諸佛が我々に知らせんとして下さる處は、何かといふに諸佛中の中心なる阿彌陀佛の大慈大悲である、今阿彌陀佛は「諸佛中の王なり、光明中の極尊なり」。此の阿彌陀佛を知らせん爲め諸佛如來が種々御苦勞下されて、此の阿彌陀佛のお慈悲に引き入れて下さるが、諸佛如來護念の思召である。茲は中々肝腎の處であります。

一應申しますと、世には色々澤山の佛がある。藥師如來大日如來觀音菩薩勢至菩薩等色々の佛がある。けれども此等十方の如來と言うものゝ、結局は何かといふと、此の十方の如來が皆な別々のお心で、別々に前後左右に引つ張り寄せようといふお慈悲では無い。諸佛彌々の御本意は、此の阿彌陀佛の廣大の御慈悲を知らせて下さるが諸佛結局のお慈悲である。色々文を引きますけれど、親鸞聖人『略文類』の終には宣はく、

三世の諸如來出世のまさしき本意は、たゞ阿彌陀不可思議願を說かんとなり。

實にひどい話である。三世の諸如來故、之を時間的に言へば過去未來現在三世の諸佛如來である。又空間的に言へば十方の如來である。其の時間的には三世の諸如來、空間的に十方の如來が「出世の正しき本意は、唯阿彌陀不可思議願を說かんとなり」お知らせ下さる所は阿彌陀佛不可思議願の外には無いといふのである。之は一寸聞くと、餘りに我が佛尊しの話のやうであるが、茲が深き意味の存する所である。抑諸佛如來

には各其佛々々の本願がある。藥師如來にすれば藥を與へて病を癒すといふ藥師如來の本願がある。斯く其の佛々々に夫れ〴〵の本願はあるが、之は夫れ〴〵一部々々の緣に從ひ、此方より導き彼方より引き寄せ、結局は阿彌陀佛の本願に到らしめんとの御手引きであつて、最後は「阿彌陀佛不可思議願を說かんとなり」とより外は無い。此の罪深き私を哀れみ下さる大悲本願の廣大なる親樣の慈悲海中に、凡てを引き入れ下さる爲めに、三世十方の諸佛、恒沙無量の諸如來と現はれ下されたのであつて、結局南無阿彌陀佛の本意を知らしめんといふより外の事は無い。全體我々は今日迄迷うて來たのである。「三恒河沙の諸佛の、出世のみもとにありしとき、大菩提心おこせども、自力かなはで流轉せり」。今日迄其の諸佛の前で長々色々の事して來たが、夫れが皆な間に合は無つた。今日長々の諸佛如來の御はぐくみで、阿彌陀の不可思議願に遇はせて貰うたのである。阿彌陀佛の親に遇はせて貰うた者が、諸佛如來を疎かにすべきでは無い、諸佛は此の阿彌陀佛の慈悲に引き入れん爲めに顯はれ下されたのである、と親鸞聖人は斯くお示し下さるのである。彌々お知らせ下さる所は阿彌陀佛の本願、南無阿彌陀佛の眞意、之をお知らせ下さる外に、三世十方諸佛の本意は無いといふのであります。

さて然らば十方諸佛の思召は、斯く阿彌陀佛のお慈悲をお知らせ下さるが御本意とは頂くが、其の事が何うして分るかといふ事になる。諸佛が何故然うして下さるかといふに、聖人の和讃には亦、

諸佛の護念證誠は、　　悲願成就のゆへなれば、

金剛心をえんひとは、　　彌陀の大恩報ずべし。

何かといふに、今日の話は大層小まかくなりますが、「諸佛の護念證誠は」……三世十方の諸佛が我々を助け救ひ度いと種々に護り念じ、證誠というて斯く澤山の佛が其佛々々の御まことを現はし下される。夫れは何かといふに、「悲願成就のゆへなれば」で、阿彌陀佛の本願にもと〳〵其の御誓ひがある。即ち第十七の願文に

說ひ我佛を得んに、十方世界の無量の諸佛、悉く咨嗟して我が名を稱せずば正覺を取らじ。

といふ御本願がある。即ち我れ阿彌陀と姿と顯はすと同時に十方世界の無量の諸佛が、悉く聲を揃えて我が名を稱せずば、我も正覺は取るまい、十方の諸佛が同時に一聲に十方世界に我が親心を說き知らせるで無ければ、我も佛とは名乘るまいといふ此の御本願である。此の御本願が既に阿彌陀佛の本願の上に斯くあるのである。親樣の之が大悲の御親心である。阿彌陀佛の親が、子供に其の親心を知らせる爲に、親類中が一味になりて汝の親は斯る難有き親樣であるぞ、此外に汝の親は無いぞと、皆の佛が聲を揃え心を合はして異口同音にお勸め下さるやうに、初めから此の事を佛の本願として置いて下さるのである。之が第十七の願である。其の本願に報ひ現はれて、十方諸佛が護念して下さる、何うか此の親の心が屆くように、此の母の心が頂けるようにと、心を合はして護り念じて下さるのである。言ひ換へれば阿彌陀佛の親が、十方諸佛が斯くして下さるように、世間的に言へば初めから約束濟みにして置いて下されてあるのである。此の廣大の悲願に報

ひ現はれて、阿彌陀佛の廣大な御親心を、十方の如來三世の薩埵が同心一體に此の私に屆けて下さるの故、「諸佛の護念證誠は、悲願成就の故なれば」である。「金剛心をえんひとは、彌陀の大恩報ずべし。」　　して見れば三世諸佛の法門種々無量に有るが、結局皆な是れ彌陀の本願海に引き入れんが爲めである。故に彌々極まる處は「金剛心をえんひとは、彌陀の大恩報ずべし」である。以上は諸佛護念の事を言うたのであるが、彌々其の三世諸佛の御手引きにより何を頂くのかといふに、彌陀の大悲、殊に本願の御眞意を聞き、金剛心を得る事一つが肝腎であるとのお示しである。すると最前より諸佛の上で申したのでありますが、其の諸佛の護念證誠は、此の阿陀陀佛一佛が衆生を一子の如く哀れみ念じて下さる、其の阿彌陀佛御一佛の御親心一つが根本である。此の「諸佛中の王、光明中の極尊」なる阿彌陀佛の御念力、御親心の程を聞かせて貰うより外は無い事となる。而して夫は阿彌陀佛の本願といふ事になるのであります。以上長々申した處も、要するに三世十方諸佛の護念、唯此の本願一つをお知らせ下さるが爲めである、といふ外の事は無いのであります。

二

さて爾らば其の大悲の御親心とは如何なるお心かといふ事になる。夫はちつとも六かしき事で無い、頂き處は唯一つである。何かといふに、我々如き諸の戒行の出來ぬ者、罪惡深重煩惱熾盛、有らゆる苦惱を持つて居る者、何れの行も及ばぬ者、諸佛のお力ではお救ひに遇はれぬ者、……諸佛の敎法には色々澤山ある。或は戒を持て往生の行とし給ふ佛もあれば、布施を以て往生の行とし給ふの佛土もある。或は善をせよ、惡をするな、等種々無量の法門は有るが、我々は何れの行も力及ばぬ。其の我々を阿彌陀佛は如何に思召し下さるか、といふ『歎異鈔』には、

罪惡深重熾盛の衆生を助けんが爲めの願にてまします。云云。

爲すべき善は出來ず、行ふ可き道は行へず、日夜に煩惱の止まぬ罪惡深重煩惱熾盛の私である。其の私を御覽下されて、其の者が可哀相だから成就した南無阿彌陀佛の名前であるぞと、其の名を親の方より名乘りかけ、其の名の中に親の心を現はし、之を衆生の心に屆け知らすが我が本願であるぞよと言つて下さるのである。『和讃』に

諸佛三業莊嚴して、　　畢竟平等なることは、
衆生虛誑の身口意を、　　治せんがためとのべたまふ。

「諸佛三業莊嚴して」……諸佛が身口意の三業を莊嚴して、身も心も意も淸らかに我々に向つて下さる。其のもとは「衆生虛誑の身口意を、治せんが爲めとのべたまふ」衆生が虛僞の身口意三業の病を治せんが爲である、と言つて下さるのである。蓮如上人は『御一代聞書』の中に、

諸佛三業莊嚴して、畢竟平等なることは、衆生虛誑の身口意を、治せんがためとのべたまふといふは、諸佛の彌陀に歸して衆生をたすけらるゝことよとおほせられさふらふ。

とお示し下された。斯く十方三世の諸佛が、一體になりて此の親の親心をお知らせ下さるが佛法の根本である。夫れ故『阿

彌陀經』にある六方段の、東南西北下上の六方世界に澤山の佛在しまして、

各其國に於て廣長の舌相を出して、偏く三千大千世界に覆ひて誠實の言を說きたまふ。汝等衆生當に是の不可思議功德を稱讚する一切諸佛に護念せらるゝの經を信ずべし。

の御文、之は何うかといふに、抑々阿彌陀佛の慈悲を說いた經が阿彌陀經である。同經末尾の文には宣はく、

舍利弗、我今諸佛不可思議功德を稱讚する如く、彼の諸佛等も亦我が不可思議功德を稱說して、是の言を作さく、釋迦牟尼佛、能く甚難希有の事を爲して、能く娑婆國土、五濁惡世、劫濁見濁煩惱濁衆生濁命濁中にして、阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸の衆生の爲に、是の一切世間難信の法を說きたまふ云云。

即ち此の娑婆國土、五濁惡世劫濁見濁……命濁の中に於て此の極難信の阿彌陀佛の大悲をお說き下されたのが阿彌陀經である。而して釋尊が此の世で之をお說き下さると同時に、十方の世界では各の佛が廣長の舌相を出して「汝等衆生當に……一切諸佛に護念せらるゝの經を信ずべし」「外の事を考へるで無いぞ、一切諸佛護念の經も此の外には無いぞ、此の阿彌陀佛廣大のお慈悲を信ぜよ」とお說き下されてある。之をお知らせ下されたのが『阿彌陀經』六方段の說法である。即ち東方の世界には、阿閦鞞佛、須彌相佛等の佛がある、南方の世界には日月燈佛、聞光佛等の佛が在します。又西方の世界には無量壽佛、無量相佛等の佛がある、斯く六方の世界に各澤山の佛が在しまして、各廣長の舌相を出し三千世界に

れど勢至和讚には宣はく、

超日月光この身には、　念佛三昧おしへしむ、
十方の如來は衆生を　一子のごとく憐念す。
子の母をおもふごとくにて、衆生佛を憶すれば、
現前當來とをからず、　如來を拜見うたがはず。
染香人のその身には、　香氣あるがごとくなり、
これをすなはちなづけてぞ、　香光莊嚴とまふすなる。
われもと因地にありしとき、　念佛の心をもちてこそ、
無生忍にはいりしかば、　いまこの娑婆界にして、
念佛のひとを攝取して、　淨土に歸せしむるなり
大勢至菩薩の　大恩ふかく報ずべし。

玆が實に有難い所である。「われもと因地にありしとき、念佛の心をもちてこそ、無生忍には入りしかば」――勢至菩薩御自身がもと因地にお出なされた時、南無阿彌陀佛の惠みに遇ひ、此の念佛の一法で無生忍には御入りなされたのである。夫故今再び「いまこの娑婆界にして、念佛の人を攝取して、淨土に歸せしむるなり」――其の勢至菩薩が此の娑婆界に念佛の元祖法然聖人と現はれ、此の本願念佛の敎えをお示し下さるのである、法然聖人は其の勢至菩薩の化現であるとお喜びなされたのである。玆になるともう殆んど口には言ふ事が出來ぬ。第十七願が成就して十方諸佛が南無阿彌陀佛をお勸め下さると言うと、何だか遠い所の話のようぢやが、親鸞聖人にする時は、眼前法然聖人に遇ひ廣大のお慈悲を頂く事が出來たは、其の大勢至菩薩が此の世に現はれて、此の愚禿親鸞に此の念佛を屆けて下されたからである。之が第十七願のお惠みである。玆に於てか「親鸞におきては唯念佛して彌陀に助けられ參らすべしとよき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なきなり」である。よき人は即ち法然聖人である。又和讚に

諸佛方便ときいたり、　源空ひじりとしめしつゝ、
無上の信心おしへてぞ、　涅槃のかどをばひらきける。

「諸佛方便時いたり」が玆である。法然聖人が此世に顯はれて下されたのでは無い。三世十方の諸佛が、此のお慈悲を屆けようと種々に心を碎いて下さる。其の諸佛方便の時至り、「本師源空世に出でゝ」である。彌々出世の時至りて、「源空ひじりとしめしつゝ」である。又

眞の知識にあふことは、　かたきかなかになをかたし、
流轉輪廻のきはなきは、　疑情のさはりにしくぞなき。

眞の知識に遇ふといふが玆である。眞の知識といふは何か、まことの知識である。何がまことか、まことの如來の惠みを示す知識故、眞の知識である。此の他力眞宗の敎の上に「善知識頼み」といふ間違ひの起つて來るは何んであるか。此の知識を信ずるの極、善知識を佛の如く思ひ、善知識の在る所を淨土の如く思ふ間違ひである。成る程大勢至菩薩の御化身、眞の知識の法然聖人なれども、我々の頂く所は、其の法然聖人のお示し下さる如來の本願を頂くのである。其の本願を頂けば

自然のことはりにあひかなはゞ、佛恩をもしりまた師の恩をもしるべきなり。（歎異鈔）

佛恩師恩は自然と分からせて頂けるのである。吳々も頂くは師を主とすべきで無い、眞の惠みを頂くが肝腎である。

三

さて斯く法然聖人は大勢至菩薩の化身として、如來廣大の慈悲をお示し下された。夫れなら此の廣大のお慈悲の頂けたは、勢至菩薩の御恩ばかりかと云ふに然らで無い。頂くは大勢至菩薩の御恩で頂けたに違ひ無けれども、其茲に至る迄の導きを考へると、去年や一昨年の事では無い、十年前太子の御廟で廣大なるお導きを蒙られたがもとである。すると大勢至菩薩の法然聖人に如來の本願をお開きなされたのであるが、其處迄導いて下された其の聖德太子はどなたであるか。聖人は觀世音菩薩の御化現とお喜びなされたのである。『和讃』に

救世觀音大菩薩、　聖德皇と示現して、
多々のことくすてずして　阿摩のことくにそひたまふ。
大慈救世聖德皇、　父のごとくにおはします、
大悲救世觀世音、　母のごとくにおはします。

觀世音大菩薩が聖德太子と現はれて、父の如く母の如く我が身を導いて下されたのである、といふ聖人のお喜びである。又『御傳鈔』には宣はく、

大師聖人すなはち勢至の化身、太子また觀音の垂迹なり。このゆへにわれ二菩薩の引導に順じて、如來の本願をひろむるにあり。云云。

我れ二菩薩の引導によりて彌陀の本願を頂いたのである。其の上は此の本願を世に弘むるが二尊の思召に叶ひ、御恩報謝をさせて頂く所謂であるとのあなたの御喜びである。すると勢至菩薩の法然上人、觀音菩薩の聖德太子、此の父と母との二菩薩のみの引導であるかといふに、否、之は歴史上に顯はれた丈けをお示し下されたのであつて、茲迄我をお導き下された佛は、中々夫れ位の事では無い。『和讃』には又、

多生曠劫この世まで、　あはれみかふれるこの身なり、
一心歸命たへずして、　奉讃ひまなくこのむべし。

昨日や今日の事て無く、今生や前生位の事て無い、「多生曠劫この世まで」である。多生曠劫以來今日迄澤山の佛が色々と心を碎いて居て下されたのである。『法然聖人和讃』より頂けば

曠劫多生のあひだにも、　出離の強緣しらざりき、
本師源空いまさずば、　このたびむなしくすぎなまし、

曠劫多生の長い間、諸佛のみ前で色々と菩提心を起したけれども、出離の強緣を知らなんだのである。夫れが此度び不思議に今生本師源空にお目にかゝり、お慈悲を頂く事が出來たのである。之は唯事では無い。「本師源空いまさずば、このたびむなしくすぎなまし」これ偏へに三世諸佛が多生曠劫の御導きであるとお喜びなされたのである。

さて斯くの如く段々頂けば、先き程も申すが如く、母の子を念ずるが如く、三世十方の諸佛が遣る瀨無き思ひを以て我々に屆けて下さる所は何かといふに、此の罪惡深重の我等を哀れと思召す廣大の親があるぞ、其の者を哀れみ其の者を助け救ふとの正覺の御誓ひが成就してあるぞ、阿彌陀佛は其の廣大の親なるぞ、と種々の手立て種々の言葉を以て我々を護念して下さる。護念して下さるは三世十方の諸佛なれども、知らさうとして下さる處は外は無い、其の罪惡の者を其の如く哀むが本

佛の意なるぞ、三世十方諸佛の本師本佛の阿彌陀佛の慈悲は此の外に無いぞと、阿彌陀佛の本願をお知らせ下さるのである。『行卷』には

是を初果に喩ふる事は、初果の聖者睡眠懶惰なれども二十九有に至らず。何況んや十方群生海斯の行信に歸命すれば攝取して捨てたまはず、故に阿彌陀佛と名けたてまつる。是を他力と曰ふ。

十方群生海、罪惡の者を攝取して捨て給はぬ。此の他迄我等を見捨てぬとある廣大の親心の佛故、阿彌陀佛と名け奉るのである。又『和讃』には

十方微塵世界の　念佛の衆生をみそなはし、
攝取してすてざれば、　阿彌陀と名けたてまつる。

阿彌陀佛とは如何なる佛であるか、本願とは何であるか、諸佛はお知らせ下さるのであるか、諸佛のお知らせ下さるお心は何うであるか、我々の頂くお慈悲は如何なる御慈悲であるか、彌々頂く阿彌陀佛とは、如何なるお慈悲の佛であるかといふに「十方微塵世界の……阿彌陀と名け奉る」――我々此罪惡の者を他迄攝取して捨てぬとある佛が阿彌陀佛である。而して其の如來の廣大な思召が聞えて下された一念が、

彌陀の誓願不思議に助けられ參らせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まうさんとおもひたつ心のおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。（歎異鈔）

である。親鸞聖人は茲の慶びを猶ほ叮嚀にお示し下されてある。即ち南無阿彌陀佛の六字名號は慈悲の父の如く、無量光の光明は慈悲の母の如し。母が子供を哀む如く、盡十方無碍の光明は我々を護持養育して下され、又父が子供に惠みを與へる爲めに、先づ親より名乘りを與へる如く、阿彌陀佛の親は先づ六字名號を以て我等を呼びかけて下さる。其の樣は丁度慈悲の父の如くである。此の慈悲の南無阿彌陀佛の父の呼び聲と、母の盡十方無碍光の光明と、此の父と母との惠みが我々に附き添うて我を見捨てゝ下さらぬ。其の有樣が本師阿彌陀佛の廣大なお哀れみであるとお喜びなされてある。而して其の阿彌陀佛の親心より現はれ出て下されて、其の親の心をお知らせ下さるか、三世十方諸佛菩薩の御本意である。さればこそ、十方諸佛が一子の如く憐念して下さると申すのである。さればこそ「大慈救世聖德皇、父の如くにおはします、大悲救世觀世音、母の如くにおはします」である。

斯くの如き光明名號の大悲父母の御哀れみと、初めて心に屆いて下された一念には、我は言ふ可き言葉も無い。唯如何にも不思議の思召なる哉、不思議の本願なる哉、南無阿彌陀佛々々々と、此の親心の至り屆いて下された有樣は、一南無阿彌陀佛の外は無い。此の不思議の本願にてまします、廣大の思召にてましますと、心に徹到して下された一念、之を信の一念といふ。先き程申した『歎異鈔』に「彌陀の誓願不思議に助けられ參らせて、往生をば遂るなりと信じて」とあるが茲である。「信じて」とは此の廣大の大悲の大もとが屆いて下された一念には、言ふ可き言葉も絶え果てゝ、唯不思議々々々と言ふより外に言ひようが無い。誓願不思議名號不思議といふは、此の言葉の絶え果てた味ひである。其の誓願の御不思議に助けられ參らする身と頂く一念「往生をばとぐるなりと

信じて」である。其の一念に如來の大悲茲に現はれ下されて思はず知らず南無阿彌陀佛々々々と口に念佛が浮んで下さる。其「念佛申さんと思ひ立つ心の起る時」まだ聲に念佛が現はれて下さらずとも、はや既に「攝取不捨の利益にはあづけしめ給ふなり」其の一念にはや既に攝取の光明中に納め取り下され、大悲の親樣は勿論、十方三世の諸佛方が喜び護り下さる身として下さるのである。『和讃』に

南無阿彌陀佛をとなふれば、梵王帝釋歸敬す、
諸天善神ことゝく、　、よるひるつねにまもるなり。
南無阿彌陀佛をとなふれば、十方無量の諸佛は、
百重千重圍繞して、　よろこびまもりたまふなり。
南無阿彌陀佛をとなふれば、觀音勢至はもろともに、
恒沙塵數の菩薩と、　かげのごとくに身にそへり。

彌々惠みを頂く一念に、瞋刻以來心を痛めて居て下された三世十方の諸佛方は、大滿足して此の度びは此者を喜び護つて下さる。三世十方諸佛の長い間の護念といふ事も、實は茲に至りて初めて頂かせて貰ふ事が出來るのである。其處で今迄は此のお慈悲を知らせる爲めの證誠護念であつたのが、此の度びは彌々滿足して我々がお慈悲を頂く一念に於て諸佛は大に喜び護りて下され、此者を稱譽讃歎して下さる。又今迄は此の一念を屆けようと、種々にお導き下された攝取の光明は、此の一念に於て此者を光明中に收め取り護つて下さる。所謂光明の襟の中へ攝め取つて下さるのである。『和讃』に曰く、

金剛堅固の信心の　さだまる時をまちえてぞ、
彌陀の心光攝護して、　ながく生死をへだてける。

阿彌陀佛の親樣は金剛堅固の信心の定まる時を十劫以來待ち兼ねて居て下されたのである。而して其の彌々「定まる時をまちえてぞ」――其の待ち兼ね給ふ廣大の御親心であつたかと其の親心の屆く一念「彌陀の心光攝護して、長く生死をへだてける」――其の光明中に收め取り、光明中に護られ、長く光明中より遁げられぬ身として下さる。此の一念に「六趣四生の因亡し果滅す」である。如來の此の廣大な惠みを頂く一念には、再び迷はうとしても迷ふ能はず、地獄に落ちようとしても落ちる事が出來ぬ。されば茲に現生十種の益とお示し下され、一には冥衆護持の益、二には至德具足の益、三には轉惡成善の益、四には諸佛護念の益、五には諸佛稱讃の益、六には心光常護の益、七には心多歡喜の益、八には知恩報德の益、九には常行大悲の益、十には入正定聚の益と斯く種々にお護り下さるのである。斯くの如く信の一念に、大悲の親樣は勿論十方諸佛諸共に喜び護り下さる身として頂くのである。

さて斯く廣大な光明中の身として頂くの故、此の一念を釋尊は眞の佛弟子とお示し下された。眞の佛弟子とは眞の知識に對する言葉である。眞の如來をお知らせ下さる知識故眞の知識、其の如來の惠みを頂いた者故、如來の眞の佛弟子、眞の子供として頂いたものである。『和讃』に

他力の信心うるひとを　うやまひおほきによろこべば
すなはちわが親友ぞと、　敎主世尊はほめたまふ。

此の他力の仰せを信じ、如來のめぐみの下に滿足する時は、其の罪惡の者、煩惱の輩、一文不知の其の者を、佛は名けて親友とお呼び下さると釋尊はお示し下さるのである。又『觀經』に宣はく、

念佛する者は當に知るべし、此の人は是れ人中の分陀利華なり。觀世音菩薩大勢至菩薩其の勝友と爲りたまふ。云云。

此の南無阿彌陀佛の惠みを信じ、念佛して喜ぶ者は、是れ人中の分陀利華である、人間中の淸蓮華であるぞよ、とお知らせ下さるのである。『維摩經』の中には、

高原の陸地には蓮華を生ぜず、卑濕淤泥に乃ち此の華を生ずるが如し。云云。

蓮華の花は立派な高原の陸地には生ぜぬ、卑濕淤泥の穢き泥中に生ずるが如く、信心の花は我々の罪のどぶ泥の中に開いて下さるなれば、此の信心を頂いた者は是れ人中の分陀利華である。分陀利華とは梵語で、蓮の事を言ふ。又觀音勢至は常に其の者に附き添うて、其の者の勝友となつて下さるぞとお示し下さるのである。之は親鸞聖人にすれば先き程申した「我二菩薩の引導に順じて彌陀の本願を弘るにあり」との聖人の御慶びが茲である。「親鸞には常に二菩薩が附いて居て、常によきように導いて下さる、其の仰せのまに〳〵彌陀の本願を弘むるばかりである」とお喜びなされたのである。『阿彌陀經』に於て十方諸佛が稱譽讃歎し、言を極めて褒めて下さるも又此の故である。

さて斯く頂くと、如來の護念といふ事は、親樣大悲の阿彌陀佛が我々に對して仕て下さる〻護念であつて、其大悲の親心より第十七願に報ひ現はれて、十方の諸佛が其の大悲の親心を十方世界に普く行き渡らし、其遺る瀨無き御引導によりて十方の衆生を其お慈悲の中に歸せしめて下さるのである。其處で其の諸佛のお心を頂くは別々に諸佛の御心を頂くのでは無い。金剛心を得る此の一つである。其の金剛の信を得る者は南無藥師如來、南無觀世音と別々に諸佛の御恩を喜ぶのでは無い。「諸佛の護念證誠は、悲願成就のゆへなれば、金剛心を得んひとは、彌陀の大恩報ずべし」である。先き程いふ『御傳鈔』の「われ二菩薩」の文の續きには、

眞宗これによつて興じ、念佛これによりて煽なり。是れ併しながら聖者の敎誨によつて、さらに愚昧の今案をかまへず。彼二大士の重願、ただ一佛名を專念するに足れり。いまの行者錯つて脇士につかふることなかれ、ただちに本佛をあふぐべしと云云。

我れ大勢至菩薩の法然聖人、觀世音菩薩の聖德太子、此の二菩薩の御手引きにより、南無阿彌陀佛のお慈悲を頂き之を世に弘むる事は實に「彼の二大士の重願、唯一佛名を專念するに足れり」で、更に自分の考へを入れた事では無い。去りながら此の二菩薩の思召は、即ち阿彌陀佛のお慈悲を頂くばかり、二菩薩の御恩は即ち阿彌陀佛の御恩であるからは、「今の行者錯つて脇士に使ふること勿れ」誤つて脇立ちの勢至菩薩や觀音菩薩に仕ふる間違ひを爲てはならぬぞ、阿彌陀佛を頂く外は、何をあがめても皆な間違なるぞ、頂く所は此の阿彌陀佛の外には無いぞ、「諸佛の護念證誠は……彌陀の大恩報ずべし」唯此の南無阿彌陀佛の廣大な如來大悲を喜べよ、とお知らせ下されたのである。而して此の大恩を喜べば、觀音勢至は大滿足して、常に影の如く身に添うて下され、十方の諸佛は此の者を百重千重圍繞して日夜に喜び護つて下さる。して見れば我々

凡夫は何に苦む事も無い。『太子和讃』には又、

聖德皇のおあはれみに、　護持養育たへずして、
　　すゝめいれしめおはします。

如來二種の廻向に、

聖德太子の廣大な御哀れみより、一代の間種々に護持養育して下され、とうど此の罪業の親鸞を、往還二種廻向の惠みの中に引き入れて下されたのだ、とお喜びなされたのである。又法然聖人の御恩をお喜びなされた段に於ても、

されば、ただ地獄なりといふとも、故聖人のわたらせたまふところへまいらんとおもひかためたれば、善惡の生所わたくしのさだむるところにあらず。云云。（執持鈔）

南無阿彌陀佛一つを喜べとの法然聖人の御教化のまに〳〵、南無阿彌陀佛一つをお喜びなされたのである。

さて斯く段々喜ばせて貰うと、諸佛の護念といふ事は斯くして段々我々を彌陀の本願に引き入れ下され、本願を頂いた上は其の者を喜び護り下さるのである。我々を此の廣大な本願に引き入れ下された三世十方の諸佛は、又我々を喜び護つて下さるのである。之が諸佛護念の廣大な御慈悲であります。色々言ひますけれども、結局頂く所は唯一つの南無阿彌陀佛の外には無いのであります。

四

猶ほ最後に、此頃私の喜ばせて貰うて居る事を申ます。夫は茲でお話すると餘りに呑氣なやうでありますけれど、親鸞聖人が『教行信證』中に法然聖人の『選擇集』の御文を引かれてある。其の『選擇集』をお引きなさる場合に、どれ丈けでも澤山お引きなされて善さそなものぢやに、『行卷』の唯一個所に、先づ初めの

選擇本願念佛集、南無阿彌陀佛、往生之業念佛爲本

の標題の文を引き、次に

夫れ速に生死を離れんと欲はば、二種の勝法の中、且く聖道門を擱きて選んで淨土門に入れ。淨土門に入らんと欲はば、正雜二行の中、且く諸の雜行を拋すて〳〵選んで正行に歸すべし。正行を修せんと欲はば、正助二業の中猶ほ助業を傍にして、選んで正定を專らにすべし。正定の業とは即ち是れ佛名を稱するなり。稱名は必ず生るゝことを得。佛の本願に依るが故に。

の文を之丈け引いてある丈けで、外に何處にも引いて無い。之は如何なるお心かといふに、法然聖人の一代の御教化は、「南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本」唯此の一つをお知らせ下さる御教化とお頂きなされたのである。之を『歎異鈔』で言ふ時は、「親鸞におきてはただ念佛して彌陀に助けられ參らすべしとよき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なきなり」とある處である。其處で一寸趣味的の話になりますけれども、非常に面白いとふと私の氣のついた事は、兼ねて聞いて居る話に、或日千の利休が豐太閤に、此頃私の家に朝顏が咲いたから見に來て下されと願ひ上げた。其處で太閤が出かけて行つた。出かけて行つて柴の戸を叩き何處に朝顏があるかと、頻りに見廻はしても見つからぬ。太閤の積りては定めて其處ら邊の柴の垣根等に一杯咲いてある事と思つて行つたのであるが、更に一向朝顏らしき物は見當らぬ。不審に思ひつゝ家に入り茶室に通ると其の床の間に唯一輪挿してあつた。其處に唯一輪ある丈けである。此の時太閤手を打つて、成る程此の朝顏で有つたかと喜んだとふい話を聞いて居る。之は甚だ趣味的の話ではありますが、何故利休が然うしたのであるか。其の一輪を其處へ生ける爲めに、垣のも門のも皆なちぎつて仕舞つたのである。其の一輪を見せる爲に、其處等邊のものを皆な捨てゝ仕舞つたのである。實は親鸞聖人は法然聖人の『選擇集』の一言一句も皆な光明の花、一字一字が廣大のお慈悲の塊りと喜んでお出なさるのである。『教行信證』の結文には宣はく

選擇本願念佛集は、禪定博陸（月輪殿兼實法名圓昭）の教命に依て撰集せしめ給ふ所也。眞宗の簡要、念佛の奥義斯に攝在せり。見る者諭り易し。誠に是れ希有最勝の華文、無上甚深の寶典也。年を涉り、日を涉り、其の教誨を蒙るの人千萬なりと雖、親と云ひ疎と云ひ、此の見寫を獲るの徒甚だ以て難し。爾るに既に製作を書寫し眞影を圖畫す。是れ專念正業の德也。是れ決定往生の徵也。仍て悲喜の涙を抑えて由來の緣を註す。慶しき哉心を弘誓の佛地に愽て、念を難思の法海に流す。深く如來の矜哀を知つて良に師教の恩厚を仰ぐ。慶喜彌々至り至孝彌々重し。茲に因て眞宗の要を詮し、淨土の要を撫ふ。唯佛恩の深きを念うて、人倫の嘲言を耻ぢず。若し斯の書を見聞せん者は、信順を因と爲し疑謗を緣と爲し、信樂を願力に彰はし、妙果を安養に顯さむ。

是れ『教行信證』の奥に、法然聖人より『撰擇集』を授かり、且つお姿を頂いた事を喜んでお記しなされた御文である。すれば聖人は『選擇集』の一句一言をも夫程迄に喜んでお出なされるのであるが、夫れ程の『選擇集』を唯一言「南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本」と、是れ丈けお引きなされたは何故であるか。つまり此の肝腎骨目の一句を活かし度いばかりに、他の言々句々の花をも實をも捨てゝお仕舞ひなされたのである。之は甚だ趣味的の話であつたけれども、何うか之を信仰の上に味はうて頂き度い、唯面白い丈けでは仕樣が無いのである。

法然聖人の御唱歌に、

阿彌陀佛といふより外は津の國の
　　難波のこともあしかりぬべし

南無阿彌陀佛以外は何言うても皆ないかぬのである。三世十方諸佛の出現も、此の南無阿彌陀佛一つがもとである。此の南無阿彌陀一つを十方衆生に知らす爲め、又此の南無阿彌陀佛を頂いた者を喜び獲るが爲めである。親鸞聖人が法然聖人よりお頂きなされた御教化は唯此の南無阿彌陀佛の一法、淨土眞宗の教と言つても此南無阿彌陀佛の外には無い。此の南無阿彌陀佛一つの惠みが三千世界に充ち滿てる惠みである。世界中の朝顏の花は、利休が唯一輪の朝顏て見られる。唯一滴の鹽水なれども夫れが四大海水の鹽水の味ひてある。唯一言の南無阿彌陀佛なれども、此の南無阿彌陀佛が盡十方無碍光如來、世界に充ち滿てる御惠みてある。其の惠みを頂き南無阿彌陀佛々々々と念佛を稱へ御恩を喜ぶより外は無い事となる。而して三世十方諸佛の護念して下さる所も畢竟此の南無阿彌陀佛の外には無い。何程言うても限りの無い事であり

ます。今日は親鸞聖人のお頂きなされた諸佛護念の味ひを申したのであります。

猶ほいつも言ふ事なれども、我々が此お慈悲を頂くは、此の人生を離れて頂くのでは無い。我々の日常の日暮は、此南無阿彌陀佛を頂く思ひより振り反ると、天地宇宙森羅萬象、其外有りとある總ての出來事は、皆な此の南無阿彌陀佛を知らせる爲めの御惠みで有つた事が分からせて貰へるのである。又頂いてからは諸天善神を初め山河天地、此の念佛の人を護持養育する御惠みなりと分からせて貰へるのである。併しながらお慈悲の分らぬ中に此事を言うと間違うて仕舞ふ。お慈悲が分つて、初めて此の事は分かるのである。お慈悲が頂けもせぬ中から天地山川皆な我を護る、夫が分かつたのが信仰であるなどゝ、そんな事は無い。お慈悲が頂ければ、此の事はひとりでに分かつて來るのである。『歎異鈔』に

念佛者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとならば、信心の行者には天神地祇も敬服し、魔界外道も障碍することなし。罪惡も業報も感ずることあたはず、諸善もおよぶことなきゆゑに無碍の一道なりと云云。

天神地祇も敬服し、魔界外道も皆な我を護るのである。何ぞ苦しんで自から惡を滅し、善を避くるを要せんやである。實に有難き極みであります。親鸞聖人の一子善鸞聖人は、親鸞聖人の教を頂きながらも、此の眞の惠みが頂け無つた爲め雜行雜修を修せられた。其の爲め聖人は此の眞實の惠みが頂けぬかと、遂に勘當してお仕舞ひなされた。御勘當なされたは、夫迄にしても此お慈悲を知らせ度いとの道る瀬なきあなたの親心てある。此のお慈悲ばかりは親子の間でも私事て無いから何とも仕樣が無い。『歎異鈔』には又、

親鸞は父母の孝養のためとて一遍にても念佛まうしたることいまださふらはず。云云。

父母に對してすらも之ればかりは私の力て無いから屆くる事が出來ぬ。又此お慈悲を頂く上に於ては、弟子といふ事も無ければ、師匠といふ事も無い。同じく『歎異鈔』に、

專修念佛のともがらの、わが弟子ひとの弟子といふ相論のさふらふらんこと、もてのほかの仔細なり。云云、

此のお慈悲を喜ぶ上からは、皆な一味の御同朋御同行である。誰の弟子彼の弟子などゝいふ事のある可き筈が無い、皆な一樣に彌陀の弟子として頂いたのであるとお示し下されたのである。

甚だ長くなりましたけれども、之を要するに諸佛護念といふ事も極まる所、彌陀のお慈悲を頂くの外は無い。之を頂けば通俗な言ひ方ではあるけれども、大悲の親樣は大に喜び下され、三世十方の諸佛は大滿足して此の者を守護して下さる。之が諸佛護念の廣大な味ひであります。私も休暇中有緣の地に於て又色々と喜ばせて貰はうと思ふ。皆さんも此の如來の光明中の日暮なる事に氣をつけて、彌々お喜びになるが何よりの事と思ひます。又未信の人に於ては猶更の事てある。此如來のお慈悲を頂くに、此の次ぎにといふ事は無い。斯く聽聞する此の席が即ち善き頂き所てある、いつても今が今と頂かねばならぬのてある。大悲の親樣は今か今かと、一刻も待ち兼ねて居て下さらぬ時は無いのてある。而して其の道る

瀬無き親心と眞に心に聞こえた時が信てある。と申した處が此方て急いて頂ける信心ては無い。親樣の呼んて下さる親樣の其の呼び聲を能く聞かせて貰はねばならぬのてある。親からいふと今日は仕方が無い明日ても、といふ事は無いのてある。治定の人に於ては猶ほ彌增し此の御恩の中の日暮なる事を喜ばせて貰はねばならぬ事てあります。『和讃』に

煩惱にまなこさへられて、　攝取の光明みざれども、
大悲ものうきことなくて、　つねに吾が身をてらすなり

倦き心を常に持ち、常に煩惱に眼暗まされて居る淺間しき私てある。源信和尚の『横川法語』の中には

念佛ものうけれども、となふれば定めて來迎にあつかる、功德莫大なるゆへに、本願にあふことをよろこぶべし。又云はく、妄念はもとより凡夫の地體なり。妄念の外に別に心はなきなり。臨終の時までは一向妄念の凡夫にてあるべきぞとこゝろえて、念佛すれば來迎にあづかりて蓮臺に乘ずる時こそ、妄念をひるがへしてさとりの心とはなれ。妄念のうちよりまうしいだしたる念佛は、にごりにしまぬ蓮のことくにて、決定往生うたがひあるべからず。

と仰せられてある。我々妄念の凡夫が、其の中より南無阿彌陀佛々々々と喜ぶ一聲々々が、此の如來廣大の惠みの現はれ、濁りにしまぬ蓮てある。『五會法事讃』には宣はく、

此の界に一人佛名を念ずれば、西方に便ち一蓮有つて生ず、但一生常にして不退ならしむれば、此の華還りて此の間に到りて迎ふ。

此の界に一人念佛すれば、其の一聲々々に極樂に一輪々々蓮華が生えて、其の華最後に此の土に來りて迎ふといふのてある。夫程廣大の南無阿彌陀佛てある。其の積りて諸共に喜び度き事てあります。

月の歌　　行誠上人

うき雲をまつの嵐にはらはせてさしいづる月の影のさやけさ。

やがてしもいづらむ月を山のはのまつは久しき物にぞありける

心まですみこそまされかくれがは市のうちにもありあけの月

秋の夜はまだ宵ながらわがいほのかたぶく軒に月のかげもる。

いりぬべき山もあらねば武藏野はつきに見るべき所なるらむ。

月やるど荒磯なみのかげ見れば思ひくだけぬよひ〳〵ぞなき。

さし出るかたわれ月よわれもまたおなじ程にもよは更にけり。

聖傳

ジヤータカ釋尊傳

久遠劫の昔《前號に續く》

スマナ佛の後にソビータ佛あらはれまし〳〵ぬ。此時亦三度の會座ありき。第一の會座には千萬の僧集まり、第二の會座には九百萬の僧第三の會座には八百萬の僧集ひぬ。時に菩薩はアジタとよべる波羅門に生れ、世尊の敎を聽き、三歸を受け、大施物を僧等に施したり。此時佛彼に「汝は佛たるべし」と豫言したまひぬ。スダムマは此佛の都にして、スダムマ王は彼の父スダムマは彼の母、アサマ及ひスネツタは主なる弟子アノマは僕、ナクラ、スジアータは尼の弟子、ナーガ樹は彼の菩提樹、彼の身長は五十八キユビツト其壽命は九萬歲なりき。

此佛のあとに一アサンキーヤスを經てアノマダシン、バジユマ、ナーラダ等の三佛陀一カルパの間に出現したまひぬ。アノマダシン佛の時亦三度の會座ありき。第一には八十萬の僧集ひ、第二には七十萬の僧、第三には六十萬の僧集まりぬ。

時に菩薩は牛の長なりき。體大に力强く、無數の牛の王なりき。彼は佛出現まし〳〵し事をきゝし時、來りて、佛陀を初め多くの大衆に大施物を布施したり。世尊亦彼に預言して「汝は佛たるべし」とのたまひぬ。アノダマシン佛の都はカンダヴアチ、ヤサバは父、ヤソダラは母、ニサヴアとアノマーは主なる弟子、ヴアルナは彼の僕、スンダリ、スマナは尼の弟子、アージユナ樹は彼の菩提樹、佛の身長は五十八キユビツトの高さ、寶壽は十萬歲なりき。

彼の後にバジユマ佛あらはれまし〳〵ぬ。此時亦三度の會座ありき。第一に億萬の僧、第二には三十萬の僧、第三には人跡斷えし深林中に住せる二十萬の僧集ひぬ。時に如來は此深林中の園に住したまひしが、菩薩は獅子に生れたり。彼は世尊の入定して跌座したまふを見奉り、眞實の心をもて、師を敬ひ、世尊をめぐること三匝、大歡喜の思を懷き高く獅子吼する事三度なりき。七日間彼は佛陀を思念して其慈悲に浴し、歡喜のあまり、餌を求めず彼處に侍して己が命を捧げぬ。七日の後世尊は定より起ちたまひ獅子を見て思へらく、「彼は僧法を信じて歸依せり、僧等をしてなほ近くによらしめん」と、僧等獅子に近よりしに彼は忽ち信を獲たり。世尊預言して曰く、「彼は必らず佛たるべし」と。此佛の都はチヤムバア、父はバジユマ王、母はアサマー、サーラ及びウバサーラは主なる弟子、ヴアルナは其僕、ラーマー及ウバラーマーは尼の弟子、クリムソン樹は彼の菩提樹、其身長は五十八キユビツトの高さ、寶壽は十萬歲なりき。

彼の後にナラダ佛御出現したまへり。亦三の會座ありき、第一には億萬の僧集ひ、第二には九十億、第三には八十億の僧集ひぬ。時に菩薩は聖者として歸依し、五種の智八聖道を

得、法に大施物を爲し赤き檀香木を捧げぬ。佛亦彼を豫言して「汝は佛たるべし」と宣ひぬ。世尊の都はダーナヴアチ、彼の父は戰士スメダ、母はアノマー、主なる弟子はバーダサラとジエタミツタ、ヴアーマツタは其從者、ウツタラとバクニは尼の弟子、大なるクリムソン樹は菩提樹、彼の身長は八十八キユビツト、其壽命は九萬歲なりき。

ナーラタ佛の後十萬シイクルに、バジユムツタラと呼ぶ佛一カルパの間に出でまし〳〵ぬ。時に亦三度の會座ありき。第一には億萬の僧集まり、第二にはヴユバラ山に於て九十萬億の僧、第三には八十萬億の僧集ひぬ。時に菩薩はジアチラとよべるマラツタとして生れ。法の爲に衣服を布施したり。時に佛亦彼に預言して「汝は佛たらん」と宣へり。此佛の時には未信者は毫もあらざりきの總ての人、天使、佛に歸恭しき。佛の都はハンサヴアチ、父は戰士アナンダ母はスジアータ、デヴアラとスジアータは主なる弟子、スマナは僕、アミタ及アサマーは主なる尼弟子、サーラ樹は彼の菩提樹、彼の身長は八十八キユビツト、後光の輝は十二ヲーグの遠きに達し、壽命は十萬歲なりき。

後三萬シイクルを經て、スメダ及びスジアータの二佛一カルパの間に出現したまへり。スメダ佛の時亦三の會座ありき。第一にはスダツサナ市に於て千萬の罪なき人々集ひぬ。第二には九百、第三には八百の聖者集まれり。時に菩薩はウツタラと呼べる波羅門の若者なりき。彼は己が貯へし八百萬の金を消費して佛陀を始め奉り法の爲に布施したり。彼よく法を聽き三寶に歸依し家を捨てゝ、法に歸しぬ。佛亦彼に豫言して「汝は佛たるべし」とのたまへり。スメダ佛の市はスダツサナとよび、スダツタ王は父、スダツタは母、サラナ及びサバカーマは主なる弟子、サーガラは僕、ラーマー、スラーマーは主なる尼弟子、大なるチヤムバカ樹は菩提の樹、彼の身長は八十八キユビツト、其壽命は九萬歲なりき。

スジアータ佛の時亦三度の會座ありき。第一には六十萬の僧集り、第二には五十億、第三には四十億の僧あつまりぬ。時に菩薩は大國の王なりき。佛出現まし〳〵を聞き行きて法を聽き、佛陀を始め奉り大衆に大施物をなし、彼の王國と七の寶物を捧げ、法に深く歸依しぬ。總ての人民佛の出世にあひて悉く僧院に仕へ、常に布施を行としたり。佛亦彼に豫言したまひぬ。佛の都はスマンガラと呼び、ウツガタ王は其父ババーヴアチは母スダツサナ及デヴアは主なる弟子、ナーラダは僕、ナーガ及びナーガサマーラは尼の弟子、大なる竹樹は彼の菩提樹、(此樹は普通の竹よりも穴小さく樹太し、而して其大なる上の枝は孔雀の尾の如く麗はし)佛の身長は五十キユビツトの高さ、其壽命は九萬歲なりき。

彼の後に一萬八千シイクル過ぎて後一カルパの間にピヤダツシン、アタダツシン及びタムダツシンの三佛陀出現したまへり。ピヤダツシンの時亦三會座ありき。第一には億萬の僧集ひ、第二には九百萬の僧第三には八百萬の僧集ひぬ。其時菩薩はカツサバとよべる若き波羅門なりき。彼は三吠陀を暗んじ、佛法を演暢したまふを聽き、億萬金を費して僧院を建て敎法を堅く信じたり。師亦彼に豫言して「一萬八千カルパの後、汝は佛たらん」とのたまへり。此佛の都はアンマとよび

父はスジンナ王、母はカンダ、バーリタ、サバタッシンは主なる弟子、ソビタは僕、スジアータとダムマジンナは主なる尼弟子、プリンヤグ樹は菩提樹なりき。彼の身長は八十キュビット、壽命は九萬歳なりき。

其後アッタダッシン佛あらはれましましぬ。彼亦三會座ありき。第一には九萬八千の僧會し、第二には八萬八千第三には亦同數の僧集ひぬ。時に菩薩は巨大なる世に隱れたるスシマとして生じ、天よりマンダーラヴァ華の日蓋を持ち來りて佛に捧げ奉りぬ。師は是を受けて亦豫言したまひぬ。此世尊の都はソビータとよび、父はサーガタ スダッザナは母、サンタ及びアバサンタは主なる弟子、アバーヤは僕、ダムマ及びスダムマは尼の弟子、チヤムバクは彼の菩提樹なりき。佛の身長は八十キュビット、其身より放つ榮光は一リーグを照し、壽命は十萬歳なりき。

其後に、ダムマダッシンとよぶ佛出現したまへり。彼亦三會座ありき。第一には千萬の僧會し、第二には七百萬第三には八百萬の僧集ひぬ。其時に菩薩は神の王サッカとして生れ天より香高き華、及び天樂を捧げぬ。師亦彼に豫言したまひぬ。此世尊の都はサラナと呼び、父はサラナ王、母はスナンダ、バジュマ及びヒュッサデヴァは主なる弟子スネッタは僕キューマ及びサッバナーマーは主なる尼弟子、赤きクレラヴァカ樹は彼の菩提の樹なりき。佛の身長は八十キュビットにして其壽命は十萬歳なりき。

彼の後に九十四シイクルへてシダッタなる一佛陀一カルパの間にあらはれましましぬ。此佛亦三會座ありき。第一には

億萬の僧集まり、第二には九百萬、第三には八百萬の僧集まりぬ。菩薩は大榮光あるマンガラとして生じ、高き智慧を得たり。彼は大なるジャムブの果を持ち來りて佛にさゝげたり。佛是を受け食し終りて豫言したまへり。曰く「九十四カルパの後汝は佛陀たらんと。世尊の都はヴヒパーラとよび、ジヒヤセナ、スシッタは主なる弟子、レヴァタは僕、シヴァリ及びスラーマーは主なる尼弟子、カニカラ樹は菩提樹なりき。佛の身長は六十キュビットにして、壽命は十萬歳なりき。

其後九十二シイクル經て一カルパの間にチッサとブッサと呼べる佛陀あらはれたまひぬ。チッサ佛の時亦三會座ありき。第一には千萬の僧集まり、第二には九百萬の僧集ひ、第三には八百萬の僧會しぬ。時に菩薩は戰士の長なるスジアータといへる富みて名高き家に生じ、戒を受け、リシの驚くべき力を得たり。彼佛陀の生じたまひしを聞き天に生ぜるが如きマンダラヴァの蓮、及びパリチヤッタカ樹の花をとりて、如來大衆に圍繞されて歩み給ふ時空中に散じぬ。師亦彼に豫言したまひ、九十二カルパの後汝は佛たるべしと宣へり。世尊の都はキューマと呼び、ジアナサンダは父、バジュマは母、神ブラーマ及びウダヤは主なる弟子、サムヴァヴァは僕、ブッサ及びスダッタは主なる尼弟子なりき。世尊の身長は六十キュビットにして年は十萬歳なりき。

彼の後にブッサ佛出現したまへり。彼亦三會座ありき。第一には六萬の僧、第二には五萬、第三には三萬二千の僧集ひぬ。其時菩薩は戰士長ヴジタヴヒとして生じたりしが已が王國を捨て、法に入りて三ピタカスを學び、人々に法を說き正義の

果を得たり。佛亦彼に豫言したまへり、世尊の都はカーシ（ベナレス）とよびシアヤセナ王は其父、シリマーは母、スラキタ及びダムマセナは主なる弟子、サビヤは僕、カーラ及びウバカーラは主なる尼弟子、アマーラカ樹は彼の菩提樹なりき。佛の身長は五十八キュビット彼の年は九萬歳なりき。

其後九十シイクル經てヴイパシン佛出現し給へり。彼亦三會座ありき。第一には六萬八千の僧第二には十萬の僧第三には八萬の僧集ひぬ。時に菩薩は大に力つよきアチュラ王と生れ、世尊に七種の寶石をもてかざれる金の椅子を布施しぬ。世尊亦彼に豫言したまへり。九十一シイクルの後汝は佛陀たるべしと。此佛の都はバンジュマチと呼び、バンジュマ王は父、バンジュマチは母、カンダチッサは主なる弟子、アソカは僕、カンダ及びカンダミッタは主なる尼弟子、ビノニアは菩提樹なりき。彼の身長は八十キュビットにして其壽は十萬歳なりき。

後三十一シイクル經てシキン及びベッサブユの二佛出現したまへり。シキン佛亦三會座ありき。第一には百千の僧集ひ、第二には八萬第三には七萬の僧集まりぬ。菩薩は時にアリンダマ王として生じ衣服其他の大施物を佛を始め奉り大衆に布施し、又七種の寶石もて飾り、總てふさわしく裝ひし壯麗なる象をも捧げぬ。此時佛亦彼に豫言したまへり、曰く「三十一シイクル經て汝は佛たらん」と。世尊の都はアルナヴァチと呼び、戰士アルナは彼の父、バヴァーヴァチは母、アビフ及サムバーヴァは主なる弟子、キューマンクラは僕、マカキーラ及バシュマは尼弟子、プンタリカ樹は彼の菩提樹なりき。

佛の身長は三十七キュビットの高さにて、壽命は三萬七千年なりき。

彼の後にヴェッサビユなる佛あらはれまし〳〵ぬ。亦三度の會座ありき。第一には八萬の僧、第二には七萬第三には六萬の僧集ひぬ。時に菩薩はスダッサナなる王に生れ、佛を始め奉り大衆に衣服等の大施物を施しぬ。戒を受けて能く持し正義の人となり、佛陀を觀じて大歡喜を見出しぬ。世尊亦彼に豫言したまひ、「三十一シイクルの後汝は佛陀たらん」と宣へり。世尊の都はアノバマと呼び、サッバチタは父、ヤサヴチは母、ワナ及びウッタラは主なる弟子、ウバッサンタは僕ダーマ及びスマーラは尼の弟子、菩提樹はサル樹なりき。彼の身長は六十キュビット壽命は六萬歳なりき。

其後此シイクルに於てカクサンダ、コナーガマナ、カッサバと我佛陀との四佛陀あらはれまし〳〵ぬ。

カクサンダの時一度の會座ありき。時に四萬の僧、集ひぬ、此時菩薩はクセーマ王なりしが衣服食鉢、藥等の大施物をなし佛陀を始め奉り大衆を供養し、法を聽きて戒を持しぬ。而して佛亦彼を豫言したまひぬ。世尊の都はキューマとよび、父は波羅門アギタッタ、母はヴサーキア、ヴジュラ及サンジウアは主なる弟子、ブジイジャは僕、サーマー及びカムバカーは主なる尼弟子、大なるシリサは菩提樹なりき。世尊の身長は四十キュビットにして寶壽は四萬歳なりき。

其後コナーガマナ佛現はれぬ。此在世に亦一度の會座ありき。三萬の僧集ひぬ。時に菩薩はババッタ王なりき。彼は多くの大臣等に圍繞されて、世尊の御許に行き法を聽きぬ。かくて

佛陀を始め奉り法の人等を招し奉り、大なる施物をなし、絹布に金を織りまぜたる麗はしき質の衣服を供養し、佛の御手より誓を受けぬ。世尊亦彼に豫言し給へり。此大聖の都はソバーヴッテ　ヤンナダッタは父、ウッタラは母、ヴイヨサ及びウッタラは主なる弟子、ソッチジアは僕、サムッダー及ウッタラは尼の弟子、ウジユムバラ樹は菩提樹なりき。彼の身長は二十キュビット壽命は三萬年なりき。

彼の後にカッサパ佛あらはれぬ。彼の在世に亦一度の會座ありき。時に二萬の僧集ひぬ。其時菩薩は波羅門の若者ジョチパーラなりき。よく三吠陀を暗んじ、チヤチカラなる陶工の友として天地に知れ渡りぬ。彼は其友と共に世尊に詣で、法を聽き御弟子となりたり。彼は熱心に三ピタカを學び眞心もてよく勤めよく義務を行ひしにより、佛陀の敎はいや輝きぬ。佛彼に亦豫言したまへり。佛の誕生地はベナレスにして波羅門ブラマダッタは父、ダーナヴァチは母、チツサ及びバーラヴァヂヤは主なる弟子、サバミッタは僕、アヌラ及アヌヴェラは主なる尼弟子ニグロダ樹は其菩提樹なりき。佛の身長は二十キュビットにして壽命は二萬歲なりき。

又此カルパに於てシバンカラ佛出現したまひ、他に三佛陀あらはれ給ひぬ。此等の時には菩薩に何の豫言もなしたまはざりき、されば之へには記さず。

かくして、次に我等の佛陀四アサンキーヤス十萬カルパを經て二十四佛陀の御前に誓を建て、遂に我等の上に降りたまひぬ。菩薩は此等の佛より悉く豫言されたまひしなり。第一に彼スメダたりし時人となり、男子、と生れ、阿羅漢果を得、諸の聖師に交り、世を捨て、德本を植え身を捨て、熱心に決定す。との八種の性を供へしによりて佛たらんとの願を滿足せり。

彼は其上にシバンカラ佛の御足の前に「佛たらんとつとむるには如何なる道をたとるべきやを求めん」と決心し、遂に十種の佛道を求め終りぬ。かくて多生を流轉して此等の諸行をはげみぬ。

佛たるへき運命を
えたりし人は數萬刧
長き道をば經めぐるも
地獄や餓鬼に生れまじ、
小さき獸にもならざらん、
人となりても盲者にも
聾者啞者にもならざらん、
婦女や不具なる性などに
生れざらまし、罪離れ、
何處にあるも清らけき
生活(タッキ)をなさん、徒らの
戲論はなれて佛道を
修して進まん、天上に
生ずるとても心なき
者にはならじ世を捨て、
汚れのうちに清淨の
行をば修して世の爲に
功德の寶を分つべし。

菩薩はかくの如く清淨の生を流轉し、波羅門アキッチ、フラミン、サンキアダーナンジアヤ王、マハーサダッサナマハーコヴインダ、ニミ王、カンダ王子、商人ヴイサーヤ、シヴヒ王及びヴエサンタラ等としてよく佛道を修しぬ。又賢き兎として生じたりし時も次の如くなりき。

食を求むる者をみて
我は己をあたへたり、
誰しも我の如くには
布施するものはあらざりき。

こは我が布施の大行ぞ。

彼は己が生命を捧げて聖なる果を獲たり。又彼蛇王シラヴア、蛇王キャムペヤ、蛇王ブウリダッタ及びアリナサッタ王子たりし時も亦よく善行を修したりき。サンキャバーラの生たりし時、

杖もて我をうつとても
鎗もて我を刺すとても
我はホージアの子にむかひ
怒りの心あらざりき。

これ我が善の行ぞかし。

といへる如くなりき。

又例へばソマナッサ王子、ハッチバーラ王子、及び賢者アヨガーラたりし時王國を捨て、出家の行を遂げぬ。又キューラスタソマたりし時も

我權勢の下にある
王國さへも唾棄しつ、
毫も執着なさざりき。

これ我出家の行ぞかし。

の如くよく世を捨て、罪の縛より自在になりぬ。

又彼賢者ヴイフーラ賢者マハーコヴインダ賢者タッダラ、賢者アラカ、比丘ボジ及び賢者マホサダたりし時智慧の果を修しぬ。又賢者セナカたりし時も、

智により我は波羅門を
痛苦より安く救ひにき
われにまされる智者ぞなき。

こは我が智慧の果にぞある。

といへる如く智慧を修し風櫃に入りし蛇を出して智慧の果を得たり。

又マハージアナカたりし時

岸邊もみえぬ海原の
水のまなかに皆人が
溺れし時はさまざまの
思の餘地はあらざらん。

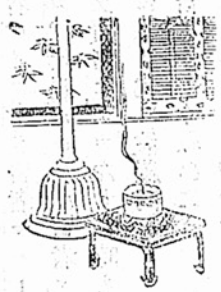
我決定もかくのごと。

といへる如く彼大洋をよぎりし時決定の果を得たり。

又カンチベーダたりし時、

感覺のなきものゝごと
彼我身をば鋭利なる
斧もてうちし時すらも
カーシの王にいさゝかも
怒の心あらざりき、

忍辱の行はかくのごと
といへる如く、彼は大なる悲痛に無覺者のごとく堪へ忍辱の
果を得たり。
又マハースタリナたりし時、
眞實の言を守りつゝ
我身を捧げたりし時
我白人の戰士をば
降服したり。眞實の
行の力はこの如し。
といへる如く彼は命を以てよく眞實を守り、眞實の實を獲た
り。
又ミューガパッカたりし時
父母も榮譽もきらはねど
我は全智の佛こそ
愛するものよ、それ故に、
我は義務をば守りたり。
といへる如く命を捧げて、彼は義務に勵み、決定の果を得た
り。
又イカラージアたりし時
誰人かよく威喝せん、
何者か我怖るべき、
慈悲の力に我は立ち
清淨に我は歡喜を得、
と命を顧みず慈悲を修し善意の果を得たり。
如此彼ソマハンサたりし時
墓地に骨をば枕して
我よこたはる其時に
村の童は我を褒め、
或はそしる其子等に
心は毫も差別なし。
といへる如く彼は恒心をすてず、村人或者は唾して彼をいや
しめ、或者は花鬘香物もて喜ばしむるも、無差別なりき。
如此滿行を修してヴェサントラの時、
悲喜にかはらぬ大地すら
我布施行の大なる
力に七度動きけり。
といへる如く、彼は大地を震動せしむる如き、大なる功德の
行をなしぬ。又壽滿ちし時ツシタ天に生じぬ。
かくの如く彼は永劫の修行を經て遂に歡喜の都に生れた
り。
（終）



講義

歎異鈔

近角常觀

第十二章

歎異鈔の著者は何人か

『先師』につきて

かつて『大切の證文ども少々ぬきいてまいらせさふらふて目やすにしてこの書にそへまいらせてさふらふなり』とあるは前九章を意味するものにして、第十一章已後に對して第一章已後各各照應して目やすとなつてあるといふ發見を公表したことであつた。而して其後歎異鈔につきて熟考したるの結果、歎異鈔の著者は何人か、又歎異鈔と教行信證との二問題につきて新らしき發見をなしたることである。是亦自ら信ずる儘を公表して、敢て同朋諸君子の歎異鈔を拜讀したまへる方々の參考に供し、且つ御意見をも承りたいと思ふのである。

第一の問題歎異鈔の著者如何は、抑々數年前歎異鈔講義を書き初むる時に揭げたる、歎異鈔の著書は何人であるかといふ問題である。現今に於ては世上の宿題として何人の頭腦にも存する疑問にして、歎異鈔の著者は如信上人であるか、唯圓房であるかといふ問題である。敢て過去の事を繰返す必要もなき樣なれど、私の意見の立つた順序を述ぶるは頗る肝要のことなれば、一往其次第柄を叙すれば次の如くである。私が當時著者を論じたる時は、勿論三河了祥師の說あることは知らなかつたのである。況んや其時より數年已前、即ち今より七八年前歎異鈔を熟讀する間、本鈔に於て御弟子の名の出て居るは唯圓房ばかりである事に不審を起し、且つ其名の出て居る第九章第十三章の筆意と、特に一本にて唯圓房が一人稱の立場にありて書きてある點より推論して、本書はたしかに唯圓房の筆に成るものであるまいかといふ意見を抱きた時に於てをやである。併ながら口傳鈔に對照するに、覺如上人が如信上人より三代傳持された節々と歎異鈔と符節を合せたるが如き有樣たること、たしかに香月院師の說の如くである。そこで當時辯じおきたる如く、聖人御滅後の原始眞宗に於ける他の異系統に對して、如信上人唯圓房覺如上人何れも正系統の人にして、且つ歎異鈔、口傳鈔、執持鈔は此系統に屬す

る書物なりとまでは斷定した。そして如信上人たると唯圓房たると左右何れかといふ斷定が爲し難かつたのである。何んとなれば前記の理由てたしかに唯圓房らしいなれど、如信上人てないといふ消極的理由及證據はない。加之愈唯圓房であると決定すれば、歎異鈔はしがきの先師口傳の眞信に異るを歎きとあるが何んとやらん穩かでないやうに思はれた。特に口傳鈔奥書と對照して、何んとやらん其間に脈絡がある樣に思はれて、歎異鈔を如信上人と無關係と斷定することが出來ぬ。又古來より如信上人の作として傳へられたる唯一の書を、如信上人の作でないといふ消極的の理由及證據なくして、全く上人と無關係と斷定するは頗る穩當ならざるのみならず信念が許さぬ點がある。故に如信上人にせよ唯圓房にせよ、同一正系統の人の作として、先つ如信上人として置く方が穩當てあろうと結びておきたのてあつた。唯、私の感ずる所によれば、歎異鈔の筆法及口調があまり鋭利なる點が、溫厚の如信上人の筆としては受取れぬ。故に私の心持は內容は如信上人の信仰て、唯圓房の筆てないかと潛に考へつゝあつたのてある。其後平松理英師の出版によりて妙音院了祥師の說が出づるに及びて、師は既に私の考へたる唯圓房說を主張されてあることを知るに至つた。當時平松師は法話誌に於て論ぜられて、近角は全く獨立に唯圓房を發揮したる眼光の鋭きは驚くべきなれど、決擇に至りてまごつかれて矢張本の如く如信上人としたと評せられた。其後了詳師の歎異鈔聞記が出版されて之を閱讀するに至りて、如何にも行き屆きたる研究にして實に非凡の學者たるに驚きた。而して唯圓房の作ならんと見込をつけられたる着眼點が全く同樣にして、私が嘗て考へて居つたことが既に槩に言ひ盡されて仕舞ふてあるので、古人の苦心と研鑽を感歎せざるを得ぬ。そして了詳師は私とは異りて斷然と唯圓房にして如信上人に非すと痛快に決擇せられた。而して如信上人に非ずと云ふ消極的理由及證據として左の如く着眼せられた。

私は直にこの抄の文に就て證據を出すに、第十章にそも〳〵かの御在世のむかし、おなじこゝろざしにて、あゆみを遙遠の洛陽にはげまし、乃至同時に御意趣をうけたまはりしかども等とある。是なんどもこの抄を書いた人が、遙々數百里の道を越えて上京して、吾祖に御目にかゝりて承りた相なり。又第二章に各々十餘箇國のさかひをこえて等とある。當陸下總より共々に上京して吾祖に呵られた。この抄を書いた人も呵られた仲間に違ない文體也。然るに如信樣は最須敬重繪詞に「幼年の昔より長大の後にいたるまて禪牀のあたりをはなれず、學窓の中にちかつきたまひければ」とありて、吾祖の御膝下て育たせられた御人なり。其御作ならば歩を遙遠の洛陽にはげましの、十餘箇國のさかひをこえてのといふ文のある筈はない。

實に烱眼犀利紙背に徹すと謂つべきてある。如何にも事實的にはよく穿ちたれども、私が單に此理由て歎異鈔を全く如信上人と無關係であるといふことはどうも首肯することは出來ぬ。前にも言ふ通り私も寧ろ唯圓房の筆に成りたるものらしいとは思へども、其結果として歎異鈔を如信上人と無關係にすることが信念上とても許すことが出來ぬ。此點につきては流石の了詳師も餘程躊躇されたものと見える。曰く、

併し是は大事のことで、古人の說も破られぬと思ふて、今度又考へて見るに、先口傳鈔と題したる口傳といふ名も、この抄の序に先師口傳の眞信とあり。又口傳鈔の題の次の本願寺聖人如信上人に對しまし〳〵ており〳〵の御物語の條々といふも、この抄の序の故親鸞聖人御物語の趣と云ふに合ふて居る。蓮師御書寫の記に於ニ無宿善ノ機一無ニ左右一不レ可レ許レ之者也と御書きなされた迄が、口傳鈔の跋にこの言が見へてある。然らは何程文に合はぬ樣ても、如信樣と云ふが善いかと思ふて、一度は挫けて見たけれども、又暗みこたへて、何にもせよこの抄の現在の文程丈夫なことはない。是に迷ふは愚痴じやと料簡を堅めて、私には先唯圓房の作と決擇するなり。尤古人も云ふた事と見えて敎典志にも唯圓の作といふ說が擧げてある。

矢張私が叙說に擧げたる通り、先師口傳の眞信といふ一點が唯圓房として何んとなく信念が許さぬ所があると見える。そこて私は遂に此に初めて多年の問題を解することを得たれば之を披瀝して歎異鈔を拜讀する人に質したいと思ふ。

私は如上の考を持ちつゝありしが、本年正月如信上人の墓に詣づる時、亦常に此問題が胸中を往來した。そこて當時の本誌に披瀝したる通り、聖人が法照少康を善導中に入れられたるが如く、唯圓房を如信上人の中に入れてよいと信仰的に考へた。そこて先づ道順として河和田の報佛寺、即唯圓房の寺に詣で、後、願入寺及金澤法龍寺如信上人の墓に詣てた。而して正月四日即御祥月御命日の夜之に着して御禮を遂げ、翌五日朝正服再び御墓前に詣て勤行の後、歎異鈔結文の露命

わづかに枯草の身にかゝりて候程にこそ云云の文を誦して、愈御暇乞をして馬車にて遙かに墓畔の銀杏樹の霞にかくれんとするを眺めつゝ、フト感じたることがあつた。即ち歎異鈔は如信上人御入寂の後、唯圓房が上人口傳の眞信を失はんことを憂へて書きたものでないかといふ事である。是即ち私が此考を得たる御緣である。

併愈々之が確信となるまでには、猶いろ〳〵と考へたることである。先づ年代を取調べたるに、第一に躓を與へたるものは、今年春の旅行の時河和田の報佛寺に於て見たる御本尊御臺座の中の板に書きてある文字である。先つ圓形の板に放光線形に開基已來十數代の住持の法名、及祥月命日がかきてある。即ち當寺開基唯圓大德、正應元年八月八日と書きてあることである。若し之を信ずれば如信上人の御入寂の正安二年に先つこと實に十二年である。して見れば唯圓房は如信上人よりは早く往生をせられたことになる。夫故殘念ながら私の所感は年代上前後する故に致方がないことゝなつた。

しかるに此頃に至りて遂に斷然として彼阿和田報佛寺の臺座の文句の頗る信ずべからざることを發見した。猶其全體につてぎ疑ふべき點あるも夫は略して、何より確かなることは、慕歸繪詞に一本に正應元年冬の頃、阿和田の唯圓房が上洛して、覺如上人に善惡二業の事につきて、面り御話をしたことが書いてある。八月八日に死んだ唯圓房が、冬の頃上洛出來る筈はない。して見れば文明年中に書きた板よりは、古き慕歸繪詞を信ぜねばならぬ。そこで唯圓房の少くとも正應元年入滅說は消えて仕舞ふ。そこで慕歸繪詞の正本には延慶元年冬の頃となりてある。是ならば如信上人御入滅後八年にしてたしかに唯圓房は上人の滅後生き延びて居つたことになる。勿論慕歸繪詞の年代を追ふて見れば、唯圓房正應元年冬の頃上洛とすれば、恰も如信上人口傳の後、覺如上人東國御巡化前になるゆへに、如信上人のみならず、唯圓房よりも色々御聞きなされて東國御巡化を思ひたちなされたと考ふることが出來るが、さりとて正本に延慶とある已上は、或は如信上人御入寂後にも上京せられたかもしれず、少くとも其頃まで生きて居られたに違ひない。そこで如信上人が御入滅なされ、唯圓房歸命わづかに枯草の身にかゝりて存命中なれば、相伴へる人々に言ふて聞かすことが出來るも我一朝にして閉眼せば必ずしどけなき有樣ならんとて、老の涙を絞りて書き殘したものが歎異鈔である、と云ふが私が確信する所である。若し

唯圓房が如信上人存命中に書きて、閉眼の後はさこそしどけなきことにて候はんずらめと歎き存じ候てとは、少々見過ぎと言はねばならぬ。

抑私が從來文章の文面及筆意にて唯圓房の如く考へらるゝにも拘らず、之を斷定すること能はざりしは、唯圓房が如信上人をさしおきて見過ぎる樣になるのが信ぜられなんだ。勿論最も此說を救ふて、後に覺如上人本願寺經營の後は如信上人を貴びたれど、原始時代の眞宗としては聖人に面授口決せし當時の弟子達は決して後より考ふる如き如信上人を中心としたるものでないと辯じて見ても、他の御弟子なればともかく、眞宗正系統を傳へたる口傳抄執持抄と同一の眞意を傳へたる歎異鈔の筆者が、どの樣なことがあつても如信上人存命中に上人を擱きて、閉眼の後はさこそしどけなからんと云ふ筈はない。そこで從來の唯圓房說は唯圓房が直に聖人のことを先師といふたものと見たのであるが、私は左樣には考へぬ。是は唯圓房が近々に示寂されたる如信上人のことを先師といふに違ひない。先づ歎異鈔のはしがきを熟讀して見るがよい。

> 竊ニ愚案ニ粗勘ニ古今ニ歎レ異ニ先師口傳之眞信ニ思レ有ニ後學相續ノ之疑惑ニ。幸不レ依ニ有緣之知識ニ者、爭得レ入ニ易行一門ニ哉。全以ニ自見ノ之覺悟ニ莫レ亂ニ他力ノ宗旨ニ。仍故親鸞聖人御物語之趣、所レ留ニ耳ノ底ニ聊註レ之。偏ニ爲レ散ニ同心行者ノ之不審ニ也。云云。

この文をよく見れば、如何樣に考へても先師と指す人と、故親鸞聖人と同樣とは見えぬ。加之よく考へて見れば口傳といふは聖人より面授口決の意味とは取れぬ。口傳と云へば、矢張聖人より少くとも一旦他を經て傳授されたることである。特に先師口傳と後學相續とを對照すれば、此時既に相承相續の意味があらはれ、且又有緣の知識といふも聖人のことゝは取れぬ。して見れば先師の如信上人を初め、相承相續の知識といふことになる。是によりて歎異鈔と如信上人と深き關係を生ずるのみならず、既に眞宗正系統の唯圓房等が信仰の中心として、如信上人を以て先師とし知識とし、尊崇歸依しつゝある有樣を徵すべきである。

そこで大に研究を要するは、先師といふ言語である。歎異鈔には何時でも故親鸞聖人とか、故聖人とか、聖人とか書きてあるも、先師といふ言語を以て聖人を呼んだことがない。唯一度先師の言の出てあるは此第十二章の終である。曰く、

たま〳〵なにごゝろもなく本願に相應して念佛するひとを

も、學問してこそなんどゝいひおとさるゝこと、法の魔障なり、佛の怨敵なり、みづから他力の信心かくるのみならずあやまて他をまよはさんとす、つゝしんでおそるべし、先師の御こゝろにそむくことを、かねてあはれむべし彌陀の本願にあらざることを。

最須敬重繪詞によるに「奥州東山の如信上人と申人おはしましき。あなかちに修學をたしなまざれば、ひろく經典をうかがはずといへども出要をもとむるこゝろざしあさからざるゆへに、一すちに聖人の教示を信仰する外に他事なし」とあれば如信上人は純信仰の人にして學問風のことをなすは大に嫌ひたまひし方なれば、特に先師の御心にそむくといふは如信上人のことを申されたることゝ深く信ずる次第である。

猶當時に於て先師といふ言葉を如何に用ゐてあるかといふに覺如上人は親鸞聖人をば祖師と宣ひ、如信上人をば先師と呼びたまへり。口傳鈔本文及奥書の如し。決して聖人を先師とは呼びたまはず。猶深く考ふるに如信上人存命中は之を今師と呼びたまへり。即報恩講式文に、他力眞宗の興行はすなはち今師の知識よりおこり、專修正行の繁昌は、また遺弟の念力より成すとある。今師の知識は即如信上人のことである、遺弟の念力は即唯圓房を初め御弟子のことであろう。又最須敬重繪詞に「京都には一人の尊宿まします、勘解由小路中納言法印宗昭これなり、當流傳來の譜系をば今師よりうけ、親鸞聖人の遺跡をば先考よりつたへたまへり」とあり。此今師は如信上人のことなり。此等の言葉遣ひより見れば、先師とはたしかに正安二年に入寂されし如信上人のことを、唯圓房が上人入寂後間もなく、即延慶元年頃に先師と呼びたるなるべし。そこで聖人御入滅よりは既に四十年餘にもなりたれば、仍故親鸞上人御物語之趣所〻留耳底聊註〻之とか、又結文に故親鸞聖人のおほせことさふらひしおもむきを百分が一かたはしばかりをもおもひいでまいらせてかきつけさふらふなりとあるのも、大に了解することが出來る。由是觀之歎異鈔は如信上人の入滅後、唯圓房が上人口傳の眞信に異ることを歎き、特に露命枯草の身に止まれる間に之を書き殘さんと欲して、如信上人と共に承りし、直々故親鸞聖人の物語を、聖人滅後四十年の後、思ひ出だして心血を注ぎて書き殘されたる、實に教行信證につぎての千歳不磨の寶典である。

告白

遺憾なき御念力

小松原謙三

此度私に告白を書けとお勸め下さいました。實は私も親樣の無始以來の御念力で信仰に入らせていたゞきましたが、告白を書いて皆さまにお目にかゝる樣な値打のある者でありませんと申しましたが、何でもよいから書けとの仰せ故、書かせていたゞきます。

私は越後鳥屋野の者でございます。御承知の通り、鳥屋野は祖師聖人が三年間草庵をお結び遊ばして邊鄙の群類のため御苦勞遊ばされた、有名な倒竹の御舊跡でありますから、隨分遠方から參詣にお出でなさる御方も澤山ありますが、あさましきかな、末世の凡夫、聖人の御苦勞を思ふ者なく、「この里に親の死したる子はなきか」と、御嘆げき遊ばした昔と今は異ならず、御舊跡近くに生れました私共、村人が、聖人御苦勞を思ふことの淺いのは慚ぢ入る次第であります。

さて私の兩親共、佛法には深く心掛げて居られますが、殊に母は年齡若くして緣付かれましたので、色々と心に苦勞せられ、早くから世の無常を感じ、何でも早く御信心をいたゞいて來世はこんな苦しい人間に生れたくない、まして地獄は一層恐ろしい所であるとのこと、早くお淨土に生れさせて頂き度いと、長い間大事にかけ求められた方であります。されば私が母のお腹に居りましたとき、どうかして今度生れる子供にも、早く佛樣のお慈悲を知らしめて、このむづかしい世中を平穩に暮させ、未來は母子共に手を携いて、お淨土に參らせて頂きたいと、佛樣にお願したと、涙ながらに話されますと、頑是なかりし子供心にも、早く御信心を頂き度いと思ふて居りました、今思ひ出しても何となく有難く尊ひ親心にむせぶのであります。

昨年の冬今迄、そむきづめの私が、漸くお慈悲に氣付かせて頂きまして、この喜びを母に申しました所が、「アゝ幸福者、目出度〳〵い、お前がお悲慈に氣付てくれゝば、母は百萬圓の身代よりも、尊く嬉しい、もはや吾が子にて吾が子に非ず、これで私も安堵である、多くの弟共をも導いてくれ」と喜び同情して下されました。信心得て喜ぶ私よりも、更に多く喜んで下さるは母であります。これにつけても、大悲の如來樣の親樣は、いかに喜びお待ち下さることやらと、嬉しう存じます。さて私の兄弟は多くございますが、私は一番兄に生れましたので、生れつき至つて我儘者で自分勝手のみ申して、兩親を困らせて居りました。中學にまいりましては、私の性質として、文學とか運動にのみ偏し、嫌いな課目は勉強しませんで、成績も宜しくない、アゝ何うしたら立派になつて、人にほめられ、兩親に安心をさせられるだらうと、自分では相當に心を苦しめました。其上追々年とるに從ひ、世の中の淺間しい有樣を見、世間の腐敗せる話を聞き、又苦しみが增し是非とも、自ら先づ道德的の者にならねばならぬと、大に修

養に心をそゝぎ、聖賢の言行を喜び、日記を書して自ら反省しましたが、少しも善くなる所でなく、日々に淺間しい日暮のみでありました。ア、、内を省みれば、惡業煩惱の身心を苦しむること絶ゆることなく、外世の中を見れば、人は皆欲界の惡魔、義利人情もあつた者でない、道德も人道もだめと世の中は善も惡もさつぱり譯の分からぬ一時に眞暗となつた樣でありました。かく世の中は眞暗なものと思ひつめ、自ら生き甲斐がない樣に思ふて居りましたが、世の中が本當に自分に逆ひ、自分は左程苦しまねばならぬ境遇にあるのかと、振返つてみますれば、耻づかしや、事實は決して然らず、前に申上げた樣な、慈悲深い父母は我を慈しみ、從順なる弟妹は我を愛し、何一つ不足云はれぬ、圓滿なる家庭の寵兒でありました。其の上私は不親切にかゝはらず親戚の伯母や從兄弟は、常に一方ならぬ同情を以て、可愛がつて下され、又私の惡魔外道の內心をも知らずに、人々は案外好意を以て私をほめてくださるのでありました。さあ、かく氣付きますと、益々自分獨りあさましき奴、並々ならぬ罪人なりと、切に我身の云ひ甲斐なく淺間しいことに氣付きました所、不思議の御手引にも昨年九月二十五日に始めて求道第八號を拜見し、先生の「唯一の信」の講話を讀み、だん〳〵深く味はせて頂き、時節到來と云はふか、宿善開發と云はふか、其後二三ヶ月の中にいつか佛樣の御懷に抱かれた心地して、細々ながら御念佛唱ひさせていたゞく樣になりました。

村では西方寺の御院主樣、奥樣、師となり母となり、又藤吉樣は兄となつて、愚かな私を導いて下さいます。伯母上も從姉妹も、村の若い人も、婆さんも、皆み法の旅の道づれとなつて喜び親んで、私を引き立てゝ下さいます。かく親子眷族共に御慈悲を喜ばせていたゞくとは、何たる幸福の事でしやう。あゝ親樣の御念力、まことにありがたいことであります。今年は春以來、色々と實地御催促にあづかり、世の無常を知らせていたゞきました。私の從妹の一人は、十六の齡を一期として此世を去られました。又私の姉の樣に親みました隣りの若い婦人の方も死なれました。この二人は幸福にも御慈悲を喜んで死なれ、後の婦人の方の如きは、願力無窮にましませば、罪業深重も重からず、わたしの樣な落つる者をしつかりと、抱いて下さると喜んで死なれました。臨終の前日私も見舞に參りまして、人間はみなこの樣に病となつて、死なねばならぬと、感殊に深くして頂きました。

前の從妹の方は、まことに無邪氣な少女で、二三年前不治の肺病にかゝられて、自然に世の無常から親樣の御慈悲を喜び、念珠と仲よくなつて、夜ひる念珠を手より離さず、わたしの寶々と、親しんで居られたと云ふ、可憐の話。どうぞ私が當時の日記を繰返させて下さい。

二月八日。妹敏子より悲しき〳〵手紙來りぬ。殘寒の候、おかはりはございませんか。私は無事で居りますから御安心下さい。つきましては、木曾子樣去る一月三十日三時四十分に死去せられまして、其時遺言に、一家一族みな〳〵樣、私は半座を分けて待て居りますから、どうぞ〳〵皆樣早く來て下さい。もし皆樣が、道をまちがへて。危い所へお來になりますと、私の顔がよごれますと、くれ〳〵もいはれて、死んでしまいましたので、皆は羨しがつて、おどろかないものはありませんでした。さよなら。

二月六日、　　とし子より。

あゝ可愛い從妹の木ちやんは、不幸であつたろうか。早く父に別れ、たゞ一人の弟と共に、母親の手にて育てられ、不治の病にかゝり、十七の花の齡を一期として黃泉の客となられた。あゝ人生是れより、いたわしい事はあるまい。然しよく考へて見よ、すこし眞面目に考へてみよ。

此世に生れて來たのは、何が目的であるか。

あゝ我等の目的は、うまい物を食べ、よい着物をき、奇麗な家にすみ、人に可愛がられ、子供を生み、立身するが、唯一の目的であらうか。いや〳〵如來樣が私等を此世に出して下さつたのは、長い〳〵迷より、眠をさまさしめ、極樂へ呼び迎へ給ふ、おめあてである。然るに人々は煩惱に眼くらみお慈悲に氣付かぬとは、悲しい事である。ア、木ちやんは死んだ、私は涙が流れた。悲しいためか。否々、木ちやんは人生の目的を達し、十七の年ゆかぬ身を以て、お慈悲を喜んで死なれた。えらかつたのを嬉しくて泣いたのだ。

世の中に人は多いが、大人は欲の爲めに眼くらみ、若い者は少しばかりの學問や、身體の丈夫なのを頼みにして、遂に此一大事が耳に入らぬとは何たるあさましい憐れなことであらう。あゝ木ちやんは淸い少女である。少女のまゝ自身の罪業の身を感ぜぬ內に、不思議の願力によりてお淨土へ參られた木ちやんの一生は美しかつた。

木ちやんは幼にして父に別れ、不治の病にかゝられたのは却つて幸福であつたかもしれぬ。余は一族の內にこんな、えらい妹をもつたことをほこりとするのである。あゝうれしい〳〵案じて居つた木曾子樣は私が却つて案じられる身でありました。木ちやんは我れ、三界に迷ふて居る愚か者を救はんとの思召の、如來樣よりのお手廻しであつたのだ。

大聖おの〳〵もろともに、凡愚底下のつみひとを、
逆惡もらさぬ誓願に、　　方便引入せしめけり。

以上當時の所感であります。私は此感想を、故人の靈前に捧げ、お慈悲を感謝いたした次第であります。

あゝ無常迅速である。何時我が平和な茅屋に、無常の風が誘はぬとも限りませぬ。ア、人はあてにならぬがまことで、世中は變りづめが眞實、火宅無常の世界、萬づの事みなそら事たわ事まことあることなしと、知らせていたゞきまして、世の中はあてにならぬと、永しへに變らぬお淨土を願ひ、人間はあてにならぬものと知りて、かわらせられぬ親樣のお慈悲を仰ぎ、あさましき我心と知りて、眞實に力となり下さるは、唯如來樣ばかりと。今更の樣に知らせていたゞきました。人は死なねばなりませぬ。淋しい恐ろしい死出の旅路、一人行かねばなりませぬ。あゝこの一寸先き闇の中に、恐怖を以て打震ひ居る我等末代の衆生に、たゞそのまゝなりて、我れをたのめ、必ず〳〵救ふぞよと、よびかけ玉ふ、親樣の招喚がなかつたならば如何しやう。申すもなか〳〵畏きことながら、この死の一大事を阿彌陀如來の誓願の御不思議にまかせ奉り、念佛唱へよ、必ず救ふぞよの御呼聲に、安堵せしめていたゞきし

上は、もはや佛智不思議を疑ひ度くも疑ふことが出來ぬ、安心の日暮をさせて頂きます。

か樣にいたゞきますと、仲々にたゞ事てはありません。彌陀大悲の光明の懷に、攝取せられましたる身の上であるとは恐れ多い事、極惡深重のこの凡夫が、死ねばこのまゝ佛にして下さるとは、不思議のことてございます。私の母は多年熱心に聽聞いたされました方て、私が動もすれば、佛のお慈悲だ、心配はいらぬと、なげやりに横着に流れて居りますると、とても助かることのできぬこの者を間違はさぬとの仰せ也と、注意して下され、私はいつも慚愧して居ります。我は現にこれ罪惡生死の凡夫、諸佛の救濟にもれて、永劫浮ぶ瀨のない私を、阿彌陀如來樣のみ、超世の悲願を建てさせられ、無間地獄のこの奴を、助けずば置くまいとの御誓ひにて、しかも其願ひが成就せさせられてあると聞いては、御親心、眞にありがたふ存じます。この仕て見樣なき私、火事場の樣に心が狂ふて居る私、今火の車の上に居る私を、そのまゝぢや動くな、間違はさぬ程に、助かる助からぬはこの彌陀が一人働、五劫兆載永劫の修行も、汝一人のためぞやと呼んで下されてどうもかうも、いたし方ない私、じつとして居れば、大悲の親樣がよき樣にして下さるとは、言葉の絶え果てたことであります。

國には、私共母子を導いて下さる、尊い尼さんがお出てになります。むだ息せずに念佛三昧の日暮をして居る方であります。仰せに、

何の計ひいらず、たゞお念佛申せば願力の不思議で助かる程に、お念佛唱へなされ。念佛唱ふれば、恒沙十方の諸佛にほめられて、親樣は深くお喜びまします程に。

以前は、何となく物足らなかつたお念佛、人前が羞しかつたお念佛が、だん〳〵のお育て、今は何の計ひもなく、相續せさせていたゞきます。念佛唱へて法の尊さを知る。私は信心も安心も頼むも知りませぬ。たゞ唱ひさせて頂きます。農事が休みの日には、村の年老ひたお婆さんや、御慈悲に氣付かれた若い人達が、お念佛相續に來てくれられます。私は此等の純樸な謙讓な人々と相會して、何の計ひなく、たゞお念佛唱させていたゞくのが、一番樂しく存じます。

御正信偈には、本願の名號は正定の業なり、至心信樂の願を因となすと、お示し下され、私共の如き愚かの奴を、光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨と攝め取つて下さると承りますれば、南無阿彌陀佛〳〵と唱へずには居られませぬ。

約束の南無阿彌陀佛となへをく
やらふやらじは彌陀のはからひ

この暑中休暇は、まことに尊い休暇でありました、毎日母の膝下て御慈悲を喜ばせていたゞきました、また東京からは恩師近角先生が御來越遊ばされ、新潟にて母と共に始終聽聞せさせていたゞきました。先生が撰擇本願念佛の御いわれをお說きなります時、渴仰のあまり、たゞ人でおわさぬと申し合つて居ります。六月二十九日には、鳥屋野の御舊跡へ、御參拜相成まして、講話もして下さいました。先生も此日は、開山聖人の昔を偲びまいらせて、有難さの餘りどうも講話の方が不出來てあつたなどお話しになりました。聖人御苦勞の御草

庵のありし御前に、御經を讀誦遊ばされました時皆々感慨殊に深く腦裡に徹し、思はず落涙いたしました。

あゝ受け難き人身を受け、聞き難き佛法を聽き、あひ難き善智識にも遇ひました。いと勿體なきことながら、

曠劫多生のあひたにも、　出離の强緣しらざりき、
本師源空いまさずば、　このたびむなしくすぎなまし。

の喜びまたなからんや。あゝ眞の善智識に遇ひ奉ること難し。私は此頃、折角この淨土眞宗の家に生れ、眞宗の敎を聽き乍ら眞の智識に遇ふことを得ず、眞のお味を味はずして、空しく又も三界に流轉せんとする人々の逆緣から。

善智識に遇ふことも、　敎ふることもまたかたし、
よくきくこともかたければ、信ずることもなをかたし。

とお示し下された、御和讃を、痛切に有がたくいたゞき、お淨土は往き易くして人なし、眞の信樂を得ること難中至難である等、一として懇願なき御言葉と知らしめて頂き我身に引きあてありがたく感じます。

此度は又重々の御緣と先生の御厚情とにより、求道學舍に入舍いたしまして、多くの御同朋と共にお慈悲を味はせて頂いて居ります。たま〳〵行信を得ば遠く宿緣を慶べ。あゝこんなしぶとい我儘ものを、こゝまて御導き下された大悲の阿彌陀如來の御念力、先生の御化導、たゞ感謝の外はありませぬ、たゞお念佛の外はありませぬ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

信仰書簡四章

殘暑之候愈〻御淸榮各地御傳道之由奉慶賀候。先般御出岡之際は御懇篤なる御話に依り、家內一同及當地一部の靑年諸氏大に喜悅罷在、深く御禮申上候。陳者御存知の山川幸作君、去月廿三日新築の製粉所機械試運轉の際、過てしらべ革にかゝり大負傷をなし、直ちに長岡病院へ入院、背骨切折の重傷とて多分生命覺束なき由に有之候處、其後の經過良好にて現在の處、生死半の見込に有之趣きに御座候。併し本人の氣分は頗る慥にて一言の愚痴を云はず、過ふ人每に法悅の談話のみにて家族知人等其法德の深大なるに感泣致さぬものとて無之、畢竟貴師の不淺御敎示の好因緣なりと欣悅罷在候。

玆に一言不思議に感じたる事有之、即山川君負傷の當日機械試運轉の少々前に職工の一人が神棚安置に際し、幸作君曰く、其神棚の御神體は私が入るゝと申し、直に自筆を以て左の通り記入被致たる一事に有之候。即ち

明治四十三年七月廿日死亡
南無阿彌陀佛
山川幸作書之
行年廿八歲

板金の切

同人負傷後(翌日ならん)職人右神棚の御神體を取出し見たるに前記の通り記入あり、幸作君の記入の意味は不明なりと雖も、其偶然か、奇遇か各不思議に感じ申居候。先は山川君消

息御報旁御禮まで、草々

八月廿六日　　清澤現英

○

謹て一書呈上仕り候、殊暑猶烈しく候處御道中御障りも無之候哉御伺申上候。

さて申上度き事は、たゞ曠劫の昔より我がためにかくも御慈悲を下されしか、懺悔とは私廿三年の罪さへ數へきれぬに六道の間作りしものを今事あたらしく申すは佛の智慧を疑ふにやと、私ながらに今は懺悔とも何とも云はずたゞ偏に念佛申居候。

先生樣の御蔭にて此處に氣をつかしてもらうて、八月十一日の曉と云ふに何とも云はれず、床の上より涙を流して暫くが程は何が何やら、悲しいやら尊いやら難有いやらわからずに泣き伏し、臥ても居られず飛び起きて井戸に至り、冷水かぶり初めて、南無阿彌陀佛、有り難いと心に感じ入り申候。神々しさに涙こぼるゝとか、有り難さに涙こぼるゝとか、尊とさに涙こぼるゝとか申候へども私は早や何とも云はれず、思ふひまも感ずるひまも、あらばこそ。「何と云ふ、何かは知らず何と云ふ、何とはなしに涙こぼるゝ」先生御蔭樣にて夢から相覺め申たる心地にて候。

四才の時死に別れし顔も見知らぬ父親に會ひ度きものと幾度か及ばぬ涙にくれしものを、先生に御面會申候折りは（十一日）此世ながらに父に會ひたる心「一切の有情は皆以て世々生々の父母兄弟なり」と云ふ有難さも身にしみ〴〵と感じ入り申候。

私は根本より誤り居り申候。一切の過去は悉皆誤り虚假とは、よく〳〵のたまひし事と有り難く感じ申候。此れまでの信仰〳〵と申たりしは、一片の理窟、虚榮の信仰に候ひき。其後先生の信仰の餘瀝、親鸞聖人の信仰、歎異鈔講義も讀まして戴き、教行信證も信卷まで、選擇集も八部になりし本五部まて拜讀さしてもらひ、唯信鈔及文意、御一代聞書、秀存百話御消息集、安心決定鈔も末燈鈔も目下よましてもらひ居り申候。

猶よく〳〵の御緣にて、西本願寺の守蟠龍（先生の御立の日停車場に出られし僧樣）氏が、私と同宿の同級生と同縣人なりと云ふ事より、廿四日に御訪ねして念珠一個有り難くいたゞき身につけ居申候。形式だからどうだの、精神的だからどうだのと如來樣にかれ是れ申す昔の罪はくれ〳〵も恐しくたまはりしまゝにおしいたゞき申候。

猶又緣ありて此の九月より眞宗御信心の家に下宿する事に相成申すべく、何から何にまで有り難く、朝起き候時は歎異鈔を拜讀、別して九章までは暗誦致し居候。夜寢る時も讀ましてもろうて床に入り申候。念佛申しつゝ何時眠るとはなしに寢入る心のらくな事、何とも早や申されがたく候。成る程「我れのみか釋迦も達磨も、阿羅漢も此の君故に、身をやつしけり」と云ふ事のよく〳〵相わかり申候。十方偏滿の御慈光何とも早や有り難く昨日までの賊心も亦氷のとけたらん樣にかへす〴〵も念佛するより外は無之候。

來年までは「求道」にて御講話戴き申すべく、來年は又た學

舍に於て御講話にあつかるにつけても不思議の緣と存じ、また南無阿彌陀佛と申すより外に無之候。

猶々書かまほしき事多々有之候へども、つまりは此處に氣をつかしていたゞいた御恩を感謝し奉るより外に書くべき事とては無之、然し何一つ我が力の及ばぬば、南無阿彌陀佛と申す、否、申さしてもろうより外に何事も無之まづは御健全に被遊度候以上。

八月廿九日　　西村友次郎

○

南無阿彌陀佛々々々々。

前略御免被下度候。陳者昨日は御親切に御着之御知らせに預り、且つ御禮の御言葉を恭ふし誠にお耻かしき事に奉存候。不思議の御緣に依りて垢穢ながら御宿申上げ、始終不行屆御無禮計り致し候に却て御禮狀に預り何とも御言葉の申上樣も無之、只々かゝる御無禮、且つきたなき御宿をも御厭なく、御腹立なく御止まり被下候事、無上の仕合歡喜是に不過候。實は最初談合之時私より御宿の義德蓮寺樣へ申出てんかと存じ候へ共、不具老人計りの家庭　到底御滿足に御宿申上る事も出來ず、且つ裝飾は無之、室は垢穢極まり候もの、內心問ひつ答へつゝ遂に申出てず經過し來り候處、二十八日即ち御着前日に至り德蓮寺樣に差支へ起り候爲、茲に遠慮するの隙なく、直に引返して兩親に御相談申上候處大に歡迎して被下候に付早速準備に取掛り御無禮ながら、不行屆ながら御宿させて頂き候事に御座候。幸に御立腹なく御止まり被下候事無上の仕合に御座候。

加ふるに家內は數月前迄皆々相反目せしもの、一度慈光の御照しに預り候てより心機一變、四海兄弟の緣、否三世を貫き給ふ大悲の御勝緣を結ばせて頂き、眞の親子眞の夫婦の仕合せを得させて頂き候に付今回の御宿の事を談ずるに歡笑、喜顏それは有難き事ですとの一言實に無量の力を得、滿身只歡喜あるのみと云ふ有樣に御座候。

思ふ事斗り申上げ御高禮申上る事は打忘れ居候。當日は御疲勞の處誠に御親切に溢るゝ御熱情と共に難有き御講話拜聽仕り、豈夜共に私は誠に難有く拜聞仕り候。殊に夜の福間氏の御話は豫て雜誌にて拜讀致し候へ共左程に感じ不申候處、此度の御話にてまことに同氏の側に居て其御苦悶之狀、御入信の有樣等見聞致し候樣感じられ實に難有く拜聽仕り候。上野氏も御都合にて明日御歸倉被遊候に付今朝一寸拜眉を得、御講話の大略御話申上げ共に喜び申候。今朝求道拜讀仕り候處一子地に就て御親切の御示し有之、上野樣へ御書き被下候御書の意味を味はひ申し、誠に難有く、如來は私を一子の如く憐念し給ふ事を喜ばして頂き申候。南無阿彌陀佛。

早速御禮狀差出し申すべき筈の處却て御禮狀に預り恐入候。御地も至極平靜に候由我　天皇陛下　の御稜威の輝き給ふ事と存じ候。尊師樣にも御心餘なく勇みて御講話御開演之事と喜び申上候。先は右乍略儀御禮申上度如斯に御座候。兩親及家內よりも宜敷との事に候。御笑受被下度候。

九月三日　　神綺長次郎

拜啓殘暑今に難去御座候。先生樣には其後御無事にて炎熱中御疲勞之身をも御厭ひなく、韓國有緣の人々へ御慈悲御傳へ被下の御苦勞を忍び申、今更の如く涅槃經之偈文難有胸迫り申候。南無阿彌陀佛。

此度の御巡錫は全く私一人の爲に如來樣の御思召にて有之、乘ての望みを滿足せしめ被下候。

嗚呼、私程の仕合せ者が有りましよか、私程親樣の御胸を痛ましむる者がありましよか勿體ない〳〵。南無阿彌陀佛。今は早何を申上げて宜布候や、御推量之程奉願上候。

其後私共以御蔭、法悦の中無事家事を勤めさせて頂き居り候。御蔭樣にて怠惰者の私も近來は朝起も出來家業も更に苦に相成不申、存外萬事相片づきつゝ有之、俗務迄もはかどらせ被下る事かと思へば勿體なく、感謝念佛ばかりに候。南無阿彌陀佛。

三舟兄より實に難有入信感謝之書簡に接し嬉しさの餘り感泣四回繰返し拜讀、御慈悲を仰ぎ申候。

嗚呼難有い佛恩なり、師恩なり、其れにつけても益々仕合せを喜ばして頂くばかりに候。

善知識に逢ふ事も敎ふる事も又難し、よく聞く事も難げれば、信ずる事もなほ難し。一代諸敎の信よりも、弘願の信樂なほ難し。難中之難と說き玉ひ、無過至難とのべ玉ふ。此難き〳〵凡てを滿足せしめて頂き候事皆々　如來樣の五刧永劫の御苦勞の心血と思ひ慚愧懺悔の外無御座候。南無阿彌陀佛。

同人の外坂口兄、川島兄、得圓寺樣の御異腹之弟（中學四年生）も御慈悲に氣付かれ被遊候由、實に不可思議の御因緣と唯々感謝念佛仕ばかりに候。時節柄御自愛御無事御歸國の程奉願上候。

九月五日　　有田廣

一、されば雜行を捨てゝ、一心を得たる念佛者は、廣大難思の慶心をうるなり。往生を前に置いてえつべしと思ふは、袖につゝむほどの喜びなり。往生掌にありて既にえつ〳〵と思へば、身にもあまりてうれしきなり。

一、如來の行を行ずるとしれば、三業なきに非ず、外現雜毒ときけば三惱又たのまれず。たゞ佛の本願をつのりとせずんば、凡夫爭てか往生の得分あらんや。

一、的をかまへて弓を射るときは、矢のあやまつことあらん。又大地を目がけて杖を以て打つには、はづるゝことあるべからず。

自力往生は定まらず、他力往生はもるべからず。

一、石は水に沈むものぢやとばかり知りて、舟に乘ずればいづれの處へも行くといふことを知らずば、其の石は終に川の向にやらるまじき也。

罪を造れば地獄に落つるとばかり知りて、他力をたのめば助かるといふことを知らずば、元來重き石の輕くならねば川を渡ることならざる如く、生れついて罪深き身なれば、罪輕くなりがたき故に、終に淨土へはまいられまじき也。

《恵空語錄》

時報

爾後の地方傳道

東北北陸方面の傳道を終へ、七月二十四日一度び歸京せる近角は、同日を以て臨時求道學舍講話及故辻夫人追吊法筵を開催し、其の翌々二十六日を以て再び第二次傳道の途に上りたるは前號所報の如し。而して爾後約六十日、幸に佛天の冥護により一日の疲倦を感ずる無く、豫定日割の如く大磯、三河、郷里、大阪、神戸、鹿兒島、琉球、九州各地等傳道を卒へ、猶ほ朝鮮各地の傳道も今や過半其の程を結びて歸京の途に上らんとしつゝあり。護持養育の恩寵實に感謝に堪えざる所とす。唯旅窓忙殺未だ其の細報を手記するの餘暇を得ず。しばらく例により左に私信を錄して之に代ふ事とせり。猶ほ月の三十日には必ず歸京、翌來月一日の第二求道會より從來の如く引き續き毎週講話開會せんとす。在京御同朋の御來集を請ふ。

（前略）今日米原驛にて驛員講話の筈の處、齟齬を生じ候爲め、はからざる時間を得候間、實は歸宅後がよけれど、又々時間なくなるかもしれず候間、一寸一筆認め候。長濱村瀨氏より一泊をたのみ來れど、此の度びはあまり歸鄕日數少なければ、村瀨氏を斷り、今夜歸宅の考に候。其の代はり或は一日午後出立、一寸京都と法隆寺とに立寄り、例の太子の像を法隆寺にて貰ひ受け、之を捧持して渡韓するつもりに候。畢竟皇太子の御志を奉ずる考に外ならず候。何んやら恰も合邦時機になる樣に御座候。一昨二十八日は大濱、二十九日は鶴崎にて講話致候。何れも海濱にて大に氣持よく候。聲は少々困り候へども身體は昨年頃よりも大に愉快に有之候（中略）今此の手紙を書きつゝある室は、いつも御なじみの井筒屋の室なり。色々思ひ出多き室なる哉。思へば〳〵佛恩の程難有嬉しく存候。南無阿彌陀佛〳〵。江洲の山色湖水如例平和也。清澤先生の墓に詣で、又句佛上人の御句、御書、御手紙、法名等拜見、先生苦行時代の法衣及鐵鉢を見る。老父君鑑鑠、即往君益々發達、夫につけても先生を偲び奉る。先生の血を吐きし室、往生せられし室、護持養育の恩、方便引入の御恩を讃歎し奉る。御養父も存命中非常に求道を愛讀したまひしといふ。御養母亦健在。法賢師勇健、何んとなく先生の面目躍如たり。特に新御法主兩御蓮枝御壯擧の當時、先生欣喜、宗門の一大事、曙光東天にかゞやくとて演說したまひし等をきいて、亦不肖當時在京、其の時の事を想起し、今昔の感に堪えず。ア、何事も佛恩師恩、南無阿彌陀佛々々々。

七月三十日　　江州米原驛より

○

拜啓、長濱にて淡水會の演說後夜九時歸家致し候。母上健康にて喜入り候。（中略）今夜は法隆寺に宿り、明日明後日（八月二三日）の二日は東明に候。四日は神戸に候間福間氏へは必ず參るべく候。不肖大に健康、心神安靜に候間御安

神被下度く候。母上の植え給へる葡萄棚累々として實に見事に心持よく候。其の他朝顔夕顔凉しき極みに候。到る處南無阿彌陀佛々々々。東京も故郷も到る處慈光照耀。

是より出立八月一日午前十時　　郷里より

○

唯今出立、今夜法隆寺とまり、明朝天王寺に立寄り、正午灘東明照明寺に着の筈。

八月一日午后一時半　　米原驛より

○

本日午後六時法隆寺停車場に着候處、御寺より御迎へ被下玄關に參り候處、菅瀬師佐伯大僧正と共に御目にかゝり、言語に絶す。南無阿彌陀佛。

廣々としたる大廣間に迎へられ、早速入浴を賜はる。清淨なる浴場身垢を洗除し、光明皇后の浴を賜はるが如き感あり。浴後氷餅、素麺、新鮮なる野菜にて御饗應にあつかり實に清淨の精食、俗腸を清からしむ。而してかねて御附屬の御約束被下し聖德太子十六歳の尊像を拜し奉る。御丈三寸八分、御臺八分、御面像肥滿豐頰、靈像也。不思議なる哉、今朝菅瀬師禮拜大にありがたがられ候。之を朝鮮に御伴申すつもりに候。朝鮮に結緣後歸京拜禮せしめたく、其の時をたのしみ居り候。

八日一日夜　　法隆寺清凉なる座敷にて

○

拜啓、朝鮮合併の御詔書、優渥なる我が　天皇陛下の御思召之程一入感泣の至りに不堪候。如何なる事にや、かねて定め置きし朝鮮傳道恰も此の千載一遇の好機に相成候事、唯々不可思議の至りと奉存候。先達も通知候通り、法隆寺に於て　聖德皇太子の御聖像を捧持致し、且島田蓉根老翁の手書せる十七憲法を持參致し、且同翁所持の太子傳を熟讀しつゝ渡韓致候事に相成り候事、難有き極みに御座候。且我眞宗の淵源は、親鸞聖人、聖德皇の御指圖によりて、誓願一佛乘眞俗二諦の宗旨を闡揚する事にて、我本山も明治十年頃過ぎより、朝鮮傳道に着手されつゝありし次第に候。特に不肖入信已來聖人の御信心を仰ぎ　特に家庭的同心一體の信心は、全く聖德皇の御誘導と難有く常に仰ぎ、かつて日本宗敎の態度につきて、赤誠を以て運動し、今年は十七憲法を講述して皇太子の眞意を發揚せんとの微志を運びつゝありしに、不思議なる哉不肖の渡韓恰も我が　天皇陛下の宮内省よりの御親使と同船になるべしと存候。實に不思議々々々、先日來發表されんとして延引しつゝある發表の期に相當り候事、不思議に候。全く千古聖德皇太子の御思召の　我聖代に於て御實現被遊候事と確信仕候。夫につきても我臣民は深く此の　陛下の御思召を十分に朝鮮にゆき渡り候樣、誠心誠意を以て朝鮮の民に臨むこと、何より肝要の事に御座候。即ち　皇太子の御思召たる三寶歸伏を第一爲政者を初めとして、十七憲法の主意を以て實行すること肝要に御座候。此度びの朝鮮傳道は、全く信仰の根源より、我が居留民か第一に信仰に入り、朝鮮日本國民同胞に對して、人道の行を爲すべき淵源は、本願一佛乘にある事を知らしめ度く存條。實は薩摩琉球を初めとして、大島

に至る迄、十七憲法及び南無阿彌陀佛の御主意貫徹致し、特に琉球の如き其の響を用ゐる事を初めとして、たしかに聖德の御仁政及び、朝貢せるもの實に難有き極みに御座候。此際朝鮮傳道出來候事、唯事ならずと存候。又維新西郷翁以來日清日露の戰役、東溪兄の戰死等。又最後の伊藤公の國難に斃れられし如き、皆此大事實の實現に候。又一面には神鞭翁の如き、一進會の如きも、たしかに此の事實にすゝむ一助となりしこと、何事も不可思議々々々。いよ〳〵今夜の船にて參り可申候。畢竟粉骨碎身出來得る限り御緣に從ひ傳道奉公仕る可く候。今も太子傳を繙き候て、朝鮮より佛經奉貢の昔を想起し、いとど難有感泣の至りに御座候。幸に佛天の御冥祐によりて、朝鮮傳道を終りて母上に歸寧致し、江州の報恩講をつとめ、又吉田君の希望に從ひ二日間傳道致し、聖德太子の御遺跡に御參詣申し、三十日歸京、九月一日の土曜二日の講話より相始め申度くと存候。先日來到處非常の優待を受け、殊に羽犬塚久留米熊本等、到る處法緣熟し、特に有田兄の處にては二日間、極樂もかくやあるらんと、實に無量の法樂を受け申候。唯々佛天の御惠みを仰ぎ奉るばかりに候。南無阿彌陀佛。

八月廿日　　小倉　神崎樣方に於て

○

豫定の如く下關乘船、稻葉勅使と同船致し、釜山上陸、以後三日間晝夜法話、講話、求道者の熱心驚くべきものあり。監獄にても話を致し、又韓人に接して頗る親愛の情あり。時局に對して不可思議なる程靜穩也。釜山出立、太田にて一晝夜、法學士澁谷太田氏の立派なる宅にて二泊。是亦眞面目な人々來集、求道會を作られたり。民長の宅に招待を受け、韓人の音樂を奏して見せて呉れ、子供男女子來りて大に親しむべく、新同胞に對して言ふべからざる親愛の情溢れて嬉し。音樂とはどらを打ち、大皷を叩き、其の樣子六齋念佛の如し。昨日は當水原にて講話、南大門の樓上にて開會恰も昨年の本月本日當地開敎たりしは不可思議の因緣。南大門の高さ四丈餘、其の上に法隆寺より捧持し來りたる聖德太子の尊像を安置し、島田蓉根翁十七憲法を張り付け、晝夜天子の當時三韓悅服の狀と、三寶歸伏の信仰及び當時の政治、文明、建築皆な信念より出づることを述ぶ、實に南大門より東に向つて禮拜したる時は、何ともかとも申述難く候。釜山は井上香憲師輪番にて十年一日の如く、太田は眞大出身の松林深慧君にして、韓人家屋より轉じて今正に布敎場出來したる處、同學諸君の奮起を望み、水原は中山祐晴君にして、十年前よりの知り合ひ、薩摩琉球に多年傳道して、昨年來當地韓人の家屋を根據地として本願寺として正に求道の士を集めつゝある次第、何れも其の辛勞感謝するに餘りある次第に候。私も此度の傳道の結果は、內地より來れる同胞に信念を植えつけ、新同胞に對して慈光を屆けんとする佛緣を結び、佛種を播き度くと存候。是より京城に向ひ申候。

八月六日　　朝鮮　水原停車場にて

○

拜啓致候。皆々無事に候哉、定めて御惠によりて無事平穩

の事と奉存候。當地の靜穩是れ亦意外にて、實は此度は或は多少の危險を冒して傳道致すべき必要もあらんかと存じ少くとも在朝鮮內地人は不安なる精神狀態に可有之、之に對し安心と慰藉を與ふるは、宗教家のつとむべき處なり。既に內地人にして此の不安ある位ならば、朝鮮新同胞は如何程不安なるべき、此の多少の不安疑惧ある朝鮮人に對して、赤誠を推して人の腹中に措くこそ、目下最急とする處なるべしと相考居申候。然に想像已上の平安なるは、固より　陛下御稜威の然らしむる處なるは申す迄もなく、畢竟大御心の天覆地載の大義、明かに實現したるものと存候。京城着以來、警察署、教育會、愛國婦人會、婦人法話會、京城婦人會、中學校及び一般公衆に對する講話、信者に對する每朝法話等、殆んど閑暇無之、昨朝も早起認めつゝありし社說を、郵便に間に合ふ樣に早々認め投函致候。何卒間に合ふ樣に祈上候。實際寸暇なしとは言ひながら、全國同信讀者諸氏に申譯無之候。先日水原出立の時より非常に冷かに相成り、實に汗かき大喜びに候。單衣にては寒き位也。他鄉秋風蕭々、一入鄉思を惹き申候。先日來十七憲法を題として、聖德太子の信仰を以て國家民人の上に、佛心を實現することを慫慂致居り候。當地は教育ある人多き丈け、夫れ丈け信仰問題にも眞摯に考ふる人多く有之、何事も佛恩佛智と存じ難有存候。到る處風物珍しく、特に兒童など、いかにも無邪氣の樣子可憐に候。希くば八道の黎民の上に佛光あれかしと存入候。南無阿彌陀佛。

京城南山本願寺に於て

九月九日

○

朝鮮到る處法緣熟して難有奉存候。此の樓門上にて（水原城八達門）にて十七憲法を話し申候。今日は平壤に參り申候。二十二日朝門司着。

於鎭南浦

九月十六日

求道會館設立喜捨金

受領報告（第四十五回）

一金貳圓也　越後　松澤鼎成殿
一金五圓也　信濃　水野了天殿
一金拾五圓也　東京　柏原文太郎殿
一金五圓也　東京　無名氏殿
一金五圓也　越後　吉田よし子殿
一金貳圓也　越後　丸山惣吉殿
一金壹圓也　近江　村瀨嘉平殿　外御一同殿
一金貳圓也　鹿兒島　吉森吉太郎殿
一金壹圓也　十勝　森繁太郎殿
一金貳圓也　米國　若林性隨殿
一金壹圓也　岐阜　小竹浩殿

通計參千四百五拾六圓八拾四錢也

小計金四十一圓也

右御寄附を忝ふし難有く奉存候玆に謹みて奉感謝也

故清澤滿之師序　近角常觀著

訂正
增補

信仰之餘歷

第拾壹版

定價卅錢
郵稅四金
袖珍美本

本書は著者が十餘年前端なくも苦悶の暗黑界に彷徨して、憂惱其極に達し、最後に佛陀靈活の慈光に浴して半歲の迷雲一時に消散したる時、自ら其心的經過を跡づけて、懺悔感謝の至情を表白したるもの、文字に些の修飾を加へず、ひたすら內心實感の披瀝に努めたるは既に諸君の知了せらるゝ處なり。而して幸に發行以來江湖同朋の愛讀一日も絕ゆる事なく。今や其の十一版を出すに及び、本書を緣として入信せられたる諸君の多數なるは吾人の私に感謝措く能はざる所、而して先きに第十版を出すに際し根本より版を改め、誤植訂正は勿論、新に增補する處六篇あり、猶ほ最後に著者が爾後の信仰經過を告白して、附錄として『予が信仰的實驗』なる一篇を加へぬ。蓋し著者が信仰の根底は本書に於て明かならん。

第二版

信仰之餘歷要略

本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に『信仰之餘歷』中の眼目「宗教的同明」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を拔萃し、傳道用小施本として印刷したるものなり。傳道に志し給ふ諸君の御試用を切望す。

定價五錢
郵稅二錢
（但し四冊迄は郵稅二錢也）

部數に應じ充分割引す

右久しく品切の處今回出來仕候也

發行所　東京市麻布區鄕東町一番地　振替口座東京一六六九六番
求道發行所　東京市本郷區森川町一番地

眞宗大學教授　東洋大學講師

齋藤唯信著

佛教倫理

宗教と倫理との關係は古往今來の大問題也。著者、佛教上に於て一隻眼を開き、この大問題に最後の解決を與へんとし、茲に本書を提供せり。理路清明、文章平易蓋し近來社會の要求する快著也。

金廿錢　郵稅二錢

一、倫理宗教の異同　二、佛教倫理根底
三、人性善惡　四、他力教の人生觀
五、善惡の標準　六、佛教道德の精神
七、佛教の道德的行爲　八、倫理實踐の修養
九、倫理に關する佛教の二大門

家庭講話

毎月一回　一日發行

一部六錢　一年七十錢

家庭問題に泣く人、幸福なる家庭を作りたき人、又家庭にありて張合なき人々は本誌を讀め、本誌は他力信仰に基き、あらゆる複雜なる家庭問題を切り開き、明快に判斷し、懇切に指導し、常に活動の源泉たる信仰を皷吹しつゝあり。苟も假名を讀み得る人にして一度本誌を繙かば、如何なる家庭にある人も、其まゝ元氣ある生活に入るを疑はず

八月號綱目

◎罪惡と恩寵◎行路難◎眺むる自己◎信德以上本領△肉づき鬼面の回想　曾我量深△買ひかぶるな　赤沼智善△信仰の安慰　柏原祐義△自覺したる婦人　曉烏敏△三從說　金子大榮△靈感　綠明△旗ふる人　うたゝ△懶き念佛　柏原祐義△光影亂轉錄　赤沼智善△雜の追憶　山邊習學△あゝ有難い　山本涓潤△東京たより　尙半社

東京巢鴨二ノ三五　無我山房　振替東京三一二二

近角常觀著作

親鸞聖人の信仰

第貳版　定價七拾錢　小包料八錢　クロース綴

本書は嘗て本誌に連載せる「眞宗慶嘆」に大訂正を加へて一書に纏めたるものなり。絶對他力信仰の大權化たる親鸞聖人一代の教證に對し、著者が平生抱懷せる渴仰、尊崇、憧憬の至情は本書に溢れて餘蘊無し。

人生と信仰

第參版　定價卅錢　郵稅四錢　珍袖美本

◎第一章　人生問題と信仰　◎第二章　悲觀思想と信仰　◎第三章　倫理力行と信仰　◎第四章　犯罪心理と信仰　◎第五章　社會問題と信仰　◎第六章　國家秩序と信仰　◎第七章　世界宇宙と信仰

本書內容は目次示すが如し。先年『求道』秋季號として發行したるもの近時四方同胞諸子の需要益々急切なるため、再び茲に一冊として刊行するに至りぬ。蓋し現代思想界の亂調は律法的教訓、若しくは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して、初めて解脫せる眞人生に入る事を得ん。是れ本書ある所以也。人生問題の解決に志ある諸君の一讀を冀ふ。

懺悔錄

附錄『歎異鈔』

第六版　定價廿錢　郵稅貳錢　珍袖美本

本書は著者が實驗の信味に基づき、古來求道者の金科玉條たる『歎異鈔』の眞髓、惡人教濟の眞意義を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歲以上胸中に欝積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と最後に佛陀攝取の慈光に接して人生の黑闇頓に一掃せる感謝の實感とを最も眞率精細に告白し、更に進みて之を王舍城の悲劇に照し、又著者が實驗を聞きて獄中大安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯一救濟の一道ある所以を叮嚀懇切に詳述したり。蓋し是れ『懺悔錄』の名ある所以にして一讀入信の人少なからず

申込所　東京市本郷區森川町一番地　東京振替口座東京六六一六九六番　求道發行所

最新刊

快樂院語錄

快樂院師肖像及筆蹟寫眞版口繪

香川晃月師編纂

上製金五拾錢　並製金參拾八錢

郵稅各金八錢

勸學占部觀順老師は、享壽八十有七、本年一月寂せらる。老師の熱烈なる信仰と、堅卓なる學識は既に世人の知る處なり。諸大家の感想には南條博士、島地勸學、村上博士、谷本博士、薗田學長、有馬執事、鈴木講師、花山講師、東陽勸學、橘學師等は信仰上來問の男女に對して、專ら他力易往の要路を示し諄々倦まず、慈誨を垂れ單刀直入疑團を闢く法話數章逸事四編を輯む、苟も信仰の修養に志すもの布教の任にあるもの須く坐右に備ふべきは本書なり。

語錄百五十ケ條

表白文科節　司教　是山惠覺師述

歎德文科節

報恩講式表白文法話

菊版全一冊　郵稅六錢

金貳拾八錢

報恩講式表白文に「爰ニ祖師聖人ノ化導ニ依テ法藏因位ノ本誓ヲ聽キ、歡喜胸ニ滿チ、渴仰肝ニ銘ズ、然レバ則チ報ジテモ報ズベキハ大悲ノ佛恩、謝シテモ謝スベキハ、師長ノ遺德ナリ云云」と是れ宗祖聖人三十三回忌法要御修行の際、傳燈第三世覺如宗主、聖人の遺德を稱揚せられしもの也今や正に六百五十年の御遠忌、既に明年の近きに丁れり。師に本文の法話を乞ひ久しく本誌の附錄として高評を博せしもの幸に有緣の法兄姉御法義の助緣となし玉はんことを。

東京都市ヶ谷御前通小路　油上

東京振替口座一一四三番　興教書院

再版

前田博士題字　泉文學士叙傳

よろこびの跡

近角常觀序　故管瀨夫人日誌

紙數二百頁　定價廿錢　郵稅二錢　十部以上割引

本書は昨年求道第九、十兩號に亘り告白欄に其の一部を掲載せる故管瀨令夫人の日誌を輯錄し紀念の爲め出版せるものなり。夫人の日誌が飾るなく僞るなく、信仰より來る日常生活其儘の告白なる事は既に本誌讀者の知了せらるゝ處なる、今や更に次版なる、道友諸君の一讀を勸告す。

東京市本郷區森川町一番地　求道發行所

振替口座東京一六六九六番

新版

近角常觀校訂（部數に應じ充分割引す）

冠頭唯信鈔文意

定價七錢　郵稅三冊迄貳錢

「唯信鈔」は親鸞聖人の法契聖覺法印の述作にして、「唯信鈔文意」は聖人特に本鈔を尊重して、其文意を講授し給へるものなり。聖人に文意の作あるに見ても本鈔の他力信仰上如何に貴重の聖典たるかは知るに足らん。本所今此の兩書を一冊にまとめて刊行す。冠頭を加へて參照用文を引用したる等凡て數異鈔に同じ。同朋諸君の精讀を勸む。

求道第六卷合本

定價　一圓二十錢
郵稅　八錢

昨年度「求道」（自第一號至第十一號）少許の殘本あり。今回便利の爲め充分堅牢にクロース綴合本に製本致し度き考に付き若し御希望の方も候はゞ右定價にて差上げ候間御申込願上候也。

東京市本郷區森川町一番地　振替口座一六六九六番　求道發行所

規定

一　本誌は毎月一回十五日發行とす
一　本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一　本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
一　郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一　凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
一　本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
一　回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一　本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一冊に付五厘
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	

廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

明治四十三年九月十二日印刷
明治四十三年九月十五日發行
發行兼編輯人　近角常觀
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
發行所　求道發行所
（振替口座東京一六六九六番）
東京市神田區表神保町
大賣捌所　東京堂

前號要目

求道

◎横着心と遠慮心　上野啓造

講話

◎一切衆生悉有佛性　近角常觀

聖傳

◎デヤーダカ釋尊傳（久遠劫の昔（承前））

告白

◎噫辻生絲衣夫人　綾部りく子

雜錄

◎信を以て能入と爲す　近角常觀

時報

◎奴異鈔につきて

◎其後の傳道概況◎爾後の傳道日割

求道第七卷第七號　明治四十年十一月十二日第三種郵便物認可　明治四十三年九月十五日發行（毎月一回十五日發行）

東京市神田區淡路町二ノ一三光堂印刷